

学生文集

— 3.11 をめぐる 53 の証言 —

2012 年度前期 西洋現代思想講義

「3.11 原発震災を考える」

担当教員：田口卓臣

巻頭のことば

この文集は、私が宇都宮大学国際学部において、2012年度前期に開講した西洋現代思想講義「3.11 原発震災を考える」の授業のなかで寄せられた受講者 53 名の最後のコメントを収録したものです。その際、私から受講者のみなさんに投げかけた質問は、次の三つでした。

- 1) 3.11 の大震災・大津波・原発事故のとき、どこで何をしていたか？ 何を感じ、何を考えたか？
- 2) この授業のなかで、どんなことが印象に残っているか？ それはなぜか？
- 3) この授業を通して、どのように考えが変わったか？ あるいは、変わらなかったか？

質問項目のすべてに答えているわけではないコメントも散見されますが、提出されたそのままの形で公表したいと思います。私は、誤字、脱字、明らかな表現の誤り以外に関しては、まったく手を加えませんでした。ただ一点、私なりの「編集」が入っているとすれば、それは、各コメントの「掲載順」です。具体的には、受講者の出身地ないし被災した地域に着目し、青森、岩手、宮城、福島、茨城、千葉、栃木、群馬、東京、秋田、山形、中部、関西以西、海外… という順番で、それぞれのコメントを配置していきました。このことにより、出来事としての 3.11 に関する経験の濃淡、距離感のニュアンスが浮びあがるのではないかと考えたからです。なお、原則として、1 人のコメントは A4 の紙で 1 ページに収まるよう努めました。

ところで、ひとつひとつのコメントを読み進めるなかで、私のなかに、ある後悔の念が持ちあがったことを打ち明けておかなければなりません。なぜなら少なからざるコメントの行間に、「この程度の文字数では、言いたいことの半分も伝えられない」といった、どこことなくどこかしそうな感覚がにじみでているように感じられたからです。もしかすると「A4 の紙で 1 ページ」という文字制限を設けることなく、各人が自由に考えたことを書けるようにしたほうが良かったのかもしれない。とりわけ私の授業に関する感想を求めたのは、この期に及んで野暮だったのではないかと悔やんでいるところです。とはいえそんな私の懸念を振り払うかのように、みなさんのストレートな言葉は、私の授業の可能性と限界を鋭く突いてくれているとも感じています。私の質問の仕方が適切であったかどうかはさておき、みなさんがこうした真剣な言葉を寄せてくれたことに感謝の気持ちをお伝えしなければなりません。この文集のみならず、みなさんが毎回のように授業について寄せてくれたコメントが励みとなって、決して楽ではなかったこの授業も、なんとか最後まで乗り切ることができました。ありがとう。

* * *

この文集をひとつの記録として遺すために、ごく手短かに授業のことを振り返っておくことにします。私の授業は「西洋現代思想講義」と銘打っておきながら、「3.11 原発震災」という目の前の出来事を扱った点で、きわめて変則的な授業でした。この点に関しては、折に触れて西洋の思想家や文学者たちの言葉を引用し、そのアクチュアルな意味を考えなおすことで、私なりにけじめをつけようとしたつもりです。

ところが、「変則的」だったのは、そればかりではありませんでした。そもそもこの授業のシラバスを書きあげた 2011 年末当時、私は 3.11 以降の数か月間に渡って自分が考えつづけたことについて、文字通り「講義」することしか念頭に置いていませんでした。ところが、初回の授業時に寄せられたコメントに目を通すうちに、この問題に関して、通常のように「講義」をしているだけではほとんど意味がないのではないかと、と自問することになったのです。私はその時になって

はじめて、3.11 について「権威」として語る資格は、実は誰にもありはしないという端的な事実気づいたのです。現に、受講者の誰もがそれぞれの仕方で真剣にこの出来事を受け止め、そして語っていました。ひとりひとりの経験の濃淡はあるにせよ、すべてのコメントが、まずはそれらに耳を傾けなければならないということを、私に切実に訴えかけているように思われたものでした。私もまたひとつの制約された立場から、あの出来事を経験したに過ぎないのだから、教壇の上から私ひとりの解釈をまくしたてるだけでは済まされないのではないか、と思うようになったのです。

こうして、私は前年から準備していた講義計画を、いったん白紙に戻すことを余儀なくされました。私は、「自分は一度教壇を降りて、受講者たちのなかに入っていかなければならない」と感じるようになりました。そして何より、受講者のひとりひとりが、「3.11 のとき、どこで何をしていたのか」、「そのときに何を感じ、何を考えたのか」、「その後の 1 年の時間をどのように過ごし、どんな思いを抱えて、この授業を受講するにいったのか」を、互いに率直に共有しあう場が必要であると結論するに至ったのです。あの日以来、3.11 に関する大量の言葉が語られ、大量のイメージが垂れ流しにされたにもかかわらず、ほかならぬその出来事をめぐって、自分のすぐ隣りに座っているひとときちゃんと話し合うという経験を持ったひとが、いったいこの国にどれくらいいたでしょうか？ このように考えてみると、いたずらに言葉とイメージが消費される一方で、この国に住む私たちは、あの日の出来事を決定的にとらえそこねてきたのではないか、という危惧を抱かざるを得ません。やや気負った言い方を許してもらえらば、私が途中から選んだ授業スタイルは、私自身を初めとする自堕落な日本社会の在り方への、ささやかな異議申し立てであったとすることができるかもしれません。

幸いなことに、宇都宮大学の図書館では、授業期間中に「3.11 後の今、地震の歴史と向き合う」という企画展示が開催されていました。また、あたかもこの授業の展開を側面からサポートするかのよう、事故後の福島第一原発に単身で潜入したフォトジャーナリスト、小原一真さんの写真展が、UU プラザで開催されることになりました。こうした千載一遇の機会に力を得ながら、この授業では毎回、受講者のみなさんが寄せてくれたコメントをプリントにして配布し、それらを全員で読み合わせていく時間を設けることにもなりました。

こうした一連の流れのなかで、全授業の概要は、結果的に以下の通りとなりました。

第 1 回 【講義】哲学とは何か？ (4/16)

「原発震災」を考えるためのイントロダクションとして、私がこれまでに得てきた 5 つの哲学的ビジョンについて語りました。

第 2 回 【コメント読み合わせ】3.11 はなぜとらえがたいのか？ (4/23)

受講者から寄せられたさまざまなコメントを全員で読み合わせながら、適宜、私の観点を補足していきました。

第 3 回 【グループ・シェア】3.11 の時、どこで何をしていたか？その後、何をどのように考えたか？ (5/7)

UU プラザにおいて、全 8 グループ (1 グループ=6 人) に分かれ、3.11 の経験を共有する話し合いの場を設けました。その際、議論や討論をするのではなく、何よりもお互いの経験や感想を尊重することを目指しました。

第 4 回 【全体発表会】原発震災は何を問いかけているか？ (5/14)

第 3 回の授業でグループごとに共有したさまざまな話題を、今度は受講者全員で共有しなおす場を設けました。

第 5 回 【展覧会鑑賞ツアー】「小原一真写真展 3.11」「3.11 後の今、地震の歴史と向き合う」(5/21)

受講者全体を 2 グループに分け、UU プラザの写真展、図書館 3 階の企画展を鑑賞するという形式の授業を行いました。そのうえで、受講者全員に、この鑑賞ツアーで考えたことをファイルの形で提出してもらいました。

第 6 回 【全体発表会】展覧会鑑賞ツアーを振り返る (5/28)

上記のコメント集を受講者全員で共有するとともに、小原一真さんにそのコメント集を送付しました。これらのプロセスを通して、災害、公害、原発等に関する基礎的な知識を確認する必要性が、次第に明らかになりました。そこで、第

7回以降の授業では、もっぱら講義形式の授業に戻し、各回のテーマをめぐる基礎知識を確認し、それらに関する哲学的な考察を施すことにしました。

第7回 【講義】災害とは何か？ (6/4)

災害心理学者、広瀬弘忠の研究成果に基づいて、「災害」の定義を行なったうえで、地震学者、石橋克彦の論文「原発震災」に基づいて、3.11 原発震災の諸相、現状、今後に関して考察を行ないました。

第8回 【講義】ひとは非常時にどうふるまうか？ (6/11)

ホップズとモンテスキューの思想を踏まえながら、レベッカ・ソルニットの「災害ユートピア」の概念を紹介したうえで、「ひとは非常時にパニックに陥りやすい」という安易な通念を「パニック神話」として定義する災害心理学の研究を応用して、3.11 と関東大震災における統治者たちの「エリート・パニック」に関する批判的な考察を行ないました。

第9回 【講義】災害、社会、民衆知 (6/18)

関東大震災直後に流行した「天譴論」に対する民俗学者、柳田国男の批判を紹介したうえで、レヴィ・ストロース、パフチン、ブリュゲル、『千と千尋の神隠し』等の思想や芸術を参考にしながら、非常時に最も実効性を持つのはその場所で受け継がれてきた「民衆知」であるという見通しを語りました。

第10回 【講義】産業技術社会とは何か？ (6/25)

それまでの講義をいったん総括したうえで、産業技術社会における「産官学」の癒着の構造を明らかにし、その構造のなかで「科学の客観性・中立性」を語ることが、どのような政治性を孕むのかということ、哲学的に考察しました。

第11回 【講義】公害とは何か？ (7/2)

水俣病に関する宇井純と原田正純の研究成果を紹介したうえで、レイチェル・カーソン『沈黙の春』と荒畑寒村『谷中村滅亡史』に基づいて、公害とは「富国強兵」を目指す産業技術社会の必然的な帰結であること、したがって、公害と戦争は表裏一体の産物であることを明らかにしました。

第12回 【映画鑑賞】土本典昭監督『原発切抜帖』 (7/23)

原発が産業技術社会のひとつの到達点であることを確認したうえで、核兵器と原子力発電の切っても切れない関係をあぶりだした上記の実験映画（45分）を鑑賞しました。

第13回 【講義】時代のはざままで、小さな声に耳を澄ます (7/30)

科学史家、山本義隆の研究に基づいて原子力の技術史を俯瞰し、宗教人類学者、中沢新一の思想に基づいて生態圏に「外部」を持ち込む原子力の存在論を紹介したうえで、原子力技術を重視するグローバル型資本主義の収奪的なメカニズムを明らかにしました。最後に、再びこの授業の原点に立ち返り、アレクシエービッチ『チェルノブイリの祈り』を踏まえながら、大きな災厄に見舞われた当事者たちの小さな声に耳を澄ますことの意味について再定義しました。

第14回 【補講】再び、3.11 を振り返る (7/31)

希望者数名で車座になって、改めて 3.11 の経験を振り返りながら、この授業を通して何を考えたか、どんなことに気づいたかということをお話し合いました。

2012年8月9日記

田口卓臣

1) 3月11日は、青森の実家で家族と一緒に過ごしていました。電気が止まってしまったため、外から情報を得る手段はラジオを聞くしかありませんでした。テレビが見られるようになってから、初めて津波の映像を見て、この震災の深刻さを自覚しました。その後も何日間か電気が使えず水も使えないという日々が数日間続きましたが、その数日間、私は大学の入学手続きのことを考えていました。今思うと、そんな時に自分のことを一番に考えていたことをとても恥ずかしく思うし、不謹慎だったなと思います。しかし、締切までに入学届がとどかないとどうしよう、など、とても焦っていました。また、ガソリンを手に入れるのも非常に困難だった状況なのに、私の兄が平気で車を使って遊びに出かけたり、私の友達が平気で遊びの誘いをしてくることに、とても苛立ちを感じ、意識の差にショックを受けました。

2) 小原一真さんの写真展を鑑賞した授業はなかなか印象的でした。授業でも、「被災者」というメディアによって作られた言葉が、東北の人々とそれ以外の人々とを分け隔てているというような内容を、田口先生もおっしゃられていました。小原さんの作品を鑑賞して、その分け隔てられた人々のリアルな思いが伝わってきて、田口先生が授業でおっしゃっていた内容を、そのまま実際に見て、本人の声を聴いているかのような感覚でした。また、小原さんのコメントもすごく心に残っているし、たくさんの人の心を動かすことができる言葉だなと感じました。

3) 今までは、原発反対か賛成かと聞かれても「今原発が停止している状態で電力が足りているなら稼働する必要はない」とあいまいな答え方しかできませんでした。今ならはっきりと「反対だ」といえます。これが一番変わった点だと思います。また、日本政府や科学者、東電に対する考えは大きく変わりました。今まで、原発問題に興味がなかったというわけではないのですが、メディアが発信する情報を取捨選択できるほどの知識はまったくなかったため、ニュースで見る情報がすべて真実だとおもっていたし、疑う心も持っていませんでした。しかし、この講義を受け、日本政府がこんなにも多くの嘘をつき、我々国民をだまし続けてきたのかというのを知ることができたし、普段なにげなく見て聞いている情報などあらゆるものを疑ってかかるという哲学的な思考も身につけることができたと思っています。

1) 地震が起きたあの日、私は春休み期間で実家のある岩手県宮古市に帰省していた。その日は堤防沿いにある市役所に用事があり、13時過ぎに出掛けた。市役所で手続きを終えてすぐ近くの眼科に行こうとして堤防の横を歩いた。しかし眼科は休診日で仕方なく母親の仕事が終わるまで本屋で時間を潰すことにした。地震が発生する14時46分のほんの3分前、母に「本屋にいる」とメールした。その3分後地震が起きて屋外に出た。ちゃんとは立ってられないくらい大きな揺れで地面が地割れして、いつもとは違う雰囲気が出ていた。中学の頃の友達にばったり会った。市の放送で注意が呼びかけられていたが、その時はまだ津波がきてもどうせいつもの数十センチだろうと思っていた。母が迎えに来てくれて友達を送る為、いつもの海沿いの道とは違う道を通った。家から津波を見ていた。津波についていろいろ考えるようになったのは少し経ってからで、自分があのとき出掛けるのがもう少し遅かったらとか、眼科が診察日だったら、あのときメールを送らなかったら、友達に会わなかったら津波に流されていたかもしれないと考えると、色んなタイミングが合っていると生きていると思った。同時にそういった家や家族をなくした友達に本当に何もしてあげることが出来ない、何も失くしていない自分がどう接していいのか分からず、毎日そればかり考えていた。原発の事故については発生時テレビも観れない状況だった為、正直言って深刻さが分からず、他人事のように考えてしまっていた。

2) この授業の中で、3.11と原発について多面的に考察することが出来た。その中でも水俣病と今回の原発事故には共通点があるという見方には驚いた。水俣病の時も企業チツソと専門家による言い逃れのような発言があったり、被災者に対する差別と分断があった。水俣病から60年近く経つが、政府と企業、専門家の非常時における対応は、現代と何も変わっていなかった。また、沖縄の米軍基地問題も今までは深くは考えたことがなかったが、沖縄はアメリカの植民地という考え方と、授業を受けていく中で、オスプレイの問題がリアルタイムで起こり、これは沖縄だけの問題ではないと深く考えるようになった。これまでニュースを観るだけで情報を鵜呑みにしてきたが、震災後は批判的に観るようになった。

3) この授業を受ける前は、3.11と言えば地元で起きた津波のことばかりを考えて、難しい原発事故のことまで考えることはしていなかった。自分に何が出来るわけでもないのに、考えても仕方がないことだと考えていたからである。しかし授業で原発内で作業にあたる、名もない作業員を写した写真展を見たことから自分の中で意識が変わった。作業員の中には被災者もいて、加害者（東電）の下でリスクを負いながら被災者が働くという構造に憤りを感じた。また、授業を受ける中で、野田首相の原発事故収束発言や、毎週金曜日の首相官邸前での反原発デモを押し切り、まともな討論の場を設けることもなく大飯原発再稼働を決定するなど私の原発に対する意識を変えた。

1) 2011年3月11日、私は宇都宮市内の実家に母と一緒にいた。地震が起きたそのとき、私は自分の部屋にいて静かに揺れに耐えていた。長い間岩手県に住んでいたため、震度5くらいの三陸沖地震は何度か経験していたが、東日本大震災では、これまで経験したことのないような地震の揺れに只々恐怖を感じていた。恐怖のあまり、私は母がいるリビングに向かうと、部屋のあらゆるものが揺れで床に落ちていた。そして母と私は座布団を頭にのせて低い姿勢を取り続けた。やっと揺れが治まったと安心したそのとき、自分はこの後どうすればいいのかとても悩んだ。実家がマンションなので、もしこの後大きな余震が来たら建物が倒れるのではないかと、でも外に出るのが本当に安全なのだろうか、そんな葛藤の中にいた。結局外に逃げることにしたが、マンションの下には多くの住民が避難していた。数時間経ってから父が無事に仕事から帰ってきたので、家族全員でスーパーマーケットに向かった。そのときにはすでに食糧が消え始めていた。こんなにもモノがあふれている日本でこんな光景を見たのは初めてであった。特にその日は大きな余震が何度も続いたし、水道も電気も使えないため情報も全く入ってこないし、真っ暗な部屋の中で先が見えない思いでいっぱいになっていた。

2) UUプラザでやったグループ・シェアが印象に残っている。今まで、大学の講義というと先生の話だけを聞いているだけで受け身的なものばかりであったが、3.11や原発事故に関して他の学生と意見を交換でき、とても刺激になったし、自分の視野や考え方がまだまだ狭く浅いことにも気づかされた。それと同時に、震災から1年以上経って少し自分の気持ちが震災復興や原発事故のことから離れていたことにも気づき、これから何十年も何百年もかかるかもしれない震災復興や原発事故の収束の問題に、一人の日本人としてもっと真剣に向き合っていかなければならないな、と強く感じる事ができた。

3) 特に原発について、広い情報や知識から反対の立場を示せるようになったと思う。今まではメディアから得た情報だけを鵜呑みにして、「原発は危険だから反対」とぐらいにしか思っていなかった。しかし、この授業を通して根本的に「災害」について学んだり、水俣病のことを学んだり、小原一真氏の写真展を実際に見に行ったりして、いろんなアングルからの知識を学ぶことによって、今まで知らなかったことやメディアでは報道されない真の情報を知ることが出来た。また、この授業を通して原発に関する興味がさらに増し、授業以外でも積極的に文献を読んだりホームページで情報を集めたりするようになった。この授業は、3.11を風化させないためにもとても重要だったと思う。

1) 私は東日本大震災発生当時、宇都宮のアパートの部屋にいた。最初は何が起こったのか理解できずにいたが、段々とアパートの外から声が聞こえた。近所の住民が外に避難していた。私はすぐに近くの友達の家に行き、お互いに安全を確認した。その後市内の電気は止まっていたため、あたりは真っ暗になり、食べるものもなかった。携帯電話で情報を得ようとしても回線が混みインターネットにはつながらなかった。しかし、駅から西側は電気が通っていて、飲食店も通常通り営業していたので夕食を食べに行くことにした。その途中、テレビの映像が目に入り、足を止めると、今まで見たことのない津波の映像が画面上に流されていた。どこで起きているのか確認すると、自分の故郷である岩手の映像が流れていて、初めて危機感を感じた。自分は高校時代、沿岸部の高校へ通っていたため、津波の被害に遭った地域出身の友人が多くいた。そのため自分の家族、友人は無事であるのかということが一番不安であった。何度電話をかけても誰にもつながらず、その日はなにもできずに終わった。次の日、安否確認のために電話をかけると、家が津波で無くなってしまった、家族が津波にのまれたなど、泣きながらもどうしようもない現実に戸惑う友人の声を聞き、事態の深刻さを認識した。自分の知っている地域が津波にのまれていくテレビの映像を見るとどうしようもなく不安になり、しかし、どうすることも出来ない自分に苛立ちさえ感じた。それ以降、自分は直接被害を受けたわけではないが、被害を受けて落ち込む友人、自分の故郷でもある東北のためにできることは一体なんなのだろうか、ということを経々考えるようになった。

2) この授業を受ける前まで、震災について考えるとき、実際に何度か被災地へ足を運びボランティア活動を行ったりしていたため、3.11＝津波というイメージが自分のなかで強く確立されていたように感じる。そのため原発事故に関する知識や問題意識も低かった。どこか自分とはかけ離れた世界で起こっている事柄のように感じ、当事者意識もそれほどなかったように感じる。しかし、授業の一環でもあった小原一真さんの写真展や講演、そして原発作業員の方のお話を聞く中で、メディアには流れない福島原発の現実、事故の深刻さ、東電社員の事故への対応など、自分のそれまで知らなかった真実を知ることができたように感じた。原発作業員の方の語った言葉のなかに「問題が解決するのには何十年もかかるし、地元のため、今の若い世代の人たちのために自分たちが犠牲になってでもがんばらなきゃならない」という一文が最も印象に残っている。自分の身の安全を犠牲にしてでも事態の収束に取り組む姿勢を見たとき、上の世代に解決を任せているだけでなく、自分たち若い世代の人間が今後何十年も向き合っていかなければならない問題であり、決して他人事ではないと強く感じるようになった。

1) 私は震災前日に岩手の盛岡へ友達を訪ねていました。1泊の予定でしたので、11日の昼頃新幹線で宇都宮へ帰っていました。岩手の一関駅で停車したと同時に地震に遭いました。駅構内がかなり揺れ、乗車していた新幹線の車両もホームにバンバンとぶつかり、駅ごと崩落するのではないかと思いました。地震が収まり、数十分車内に待機させられている間、沖縄にいる親に連絡を入れ、状況を説明している時、親の声で恐怖と緊張が和らぎ涙したのを覚えています。その後、駅員の指示で駅の外へ出されました。全くなにもわからない状態で避難所である市民ホールへ案内させられました。そこで、津波や原発事故について初めて学びました。結局、JRさんがバスで山形まで送迎し、東京そして地元の沖縄へ着くまでの間、避難所で3泊しました。

2) 田口先生の原発事故の捉え方はもちろん印象付けられました。しかし、それ以上に、学生たちのコメントを読むことで、さらに複眼的な考えや彼らの想いは、この講義を履修した甲斐があったと思わせるものでありました。かなり個人的なことに言及すると、先生に沖縄と原発を関連させた私のコメントを取り上げてもらったことで、他の学生たちに、観光以外の視点から観る沖縄への共通理解を得られたのではないかと思います。

3) 原発または福島を考える場合に、私は米軍基地のあり方へも意識が及んでしまいました。周辺が中央に依存しているわけではなく、中央が周辺に依存している実態が明瞭になりました。原発や米軍基地にしても、地域(周辺)の存在がなければ、中央はなにもすることができないというものが確実にあると思いました。社会の周辺にいる我々に対する中央のすることは、どの次元においても不確実な政策を押し付けるだけの能力しかないこと、それは同時に日本の未来の不確かさを知らせるものでもあると感じました。

1) 私はそのとき、家にいて自分の机でパソコンをしていた。地震に気付いたときは「いつもの震度3くらいだろう」と思って何もしなかったが、揺れが大きくなったので机の下に隠れた。今まで経験したことのない大きな揺れだったのですこし怖くなった。すると、別の部屋にいた兄が平然と歩いていたので驚いた。両親が出かけていたので、帰ってくるまでずっと心配だった。テレビをつけてみると震度と地域を示したテロップが画面の上に表示されていたが、しばらくするとほとんどすべてのチャンネルが緊急報道特番に切り替わった。

揺れる市庁舎、津波の押し寄せる状況をヘリから撮影した映像、気仙沼の大火災などが映し出され、やっ和大変な事態になっていることを理解した。行方不明者・死傷者の数がどんどん膨れ上がっていったのがとても信じられなかった。とりあえず家族が無事だったのでほっとしていた。

2) 授業はどれも印象深かったが、一番は柳田國男の話である。それまで民俗学というものは全く面識がなく、何をやっているのかわからない学問という認識だったが、先生のお話を聞いてから興味が湧いてきた。彼の著作を多少なりとも読み、彼の生涯を語ったDVDをみたり、民俗学の本を読んだりした。

3) これまで、人間社会は私の知らないところで勝手に進められているものだと思っていた。私はそれをただ安穏と受け入れ、疑うことなく暮らしていくのだとなんとなく感じていた。しかし、この授業を受けてから今社会で起こっていること、問題となっていること、昔の人々の声、他人の意見を知る機会が増え、それらは私と密接に関係していることが分かるようになった。考えなければならぬことは山ほどあるのだと痛感した。

1) 震災が起きたとき、私は兄と一緒に宮城の実家に居ました。ちょうど二人で茶の間にテレビゲームをしていたときです。揺れが始まったときは「また地震かあ、最近多いよね」といつもの地震だと思っていました。しかし揺れが治まらずいきなり強い揺れに変わったのでコタツに潜りました。これまでに経験したことのない大きさの地震で、しかもあまりにも長い間揺れが続いたので、あの時は本当に死ぬかもしれないと思いました。震災後は約1週間電気も水道もガスも使える状態ではなく、物流も途絶えていたので、近所の人たちと協力して過ごしました。(自家発電できる家に行って水をもらって来たり、米がない家にはおにぎりを作って持っていったり) ラジオだけが情報を得る手段だったので、「石巻がなくなった」とか「建物がみな流されて何もなし」という報道を聞いても、あまり実感がわきませんでした。力が抜けてぼーっとする感覚でした。信じられない、というのがその時の感想だと思います。その反面、石巻に住む友人は生きていられるだろうか、と知り合いの安否が心配で、そわそわしていたのも事実です。数日経ってやっとテレビが見られるようになってから津波の映像を見てとてもショックを受けました。家や家族を亡くした人々の映像を見て涙がでました。正直私はどちらかというと原発よりも津波の被害に注目していました。あの時、原発のニュースを見ても他人事のようにしか感じていなかったと思います。

2) この授業で印象に残っているのは、UUプラザで行われた意見交換をしたグループ・シェアの回です。震災後初めてまともな意見交換ができ、自分の考えがまだまだ浅いことを反省するとともに様々な視点から原発や津波の問題について考えることができたからです。グループ内でも色々な地域や立場の人がいて、それぞれの異なる意見を聞く貴重な時間だったと思います。周囲が3.11を過去の出来事としてとらえているように感じていた時だったので、そのタイミングで皆が自分が思っているよりずっと深く考えていることを知れたというのは良かったです。

3) 原発に対しての意識が高まったように思います。以前は3.11というと自分の中では大地震と津波がメインで、原発についてはあまり重く考えていませんでした。しかし、この授業を通して「原発がもはや人間の手によって制御不能であること」「政府や東電の誠意の感じられない対応」「原発がいかに危険か」など、原発に目が向くようになったと思います。

3月11日、午後2時46分。私は母親と買い物に行く途中の車に乗っていた。小さな揺れがしばらく続き、やがて車が横転しそうなほどの強い揺れが起きた。急いで家に帰ると、家の中は津波の被害にあわないまでも、めちゃくちゃになっていた。私は今までこのような大災害にあったことがなかったため、どのくらい大変なことか想像がつかず、楽観的に考えていた。しかし実際は停電も断水もしばらく続き、何とか生活するのが精いっぱいという状況だった。したがってあの津波のことを知るのには電気が復旧した震災5日後である。その映像を見たとき、初めは現実の映像と思えなかった。地元も規模は小さいが津波にあったし、自分も苦労していたと思っていたが、もっとつらい目にあっている人たちがいることにショックを覚えた。家族も家もあり、まず自分が生きていること。今まで当たり前だと思っていたことにこれほど感謝したことはないだろう。しかし、今度は原発問題が出てきた。この原発問題に関しては信用性に欠けるチェーンメールが届くなど、情報がかなり錯綜し、混乱を招いた。次から次へとあらゆる災害が起き、自分が置かれている状況があまり信じられなかった。正直、私の中でもこの震災は「想定外」だった。たとえそのような大災害があったとしても、自分がその被災者になるなどと考えもしなかった。そう考えると今までの自分は何の危機感も抱かず、何も考えずに生きてきたのだと実感した。ある意味幸せではあるが、これからはもっと防災の意識を高めなければならないと感じた。

そうして震災後一年以上が経ち、西洋現代思想の授業で東日本大震災について触れることになる。授業で一番印象に残っていることは、第8回講義の統治者のパニック恐怖症についてである。なぜなら、人々がパニックになることを過度に恐れることで、統治者自身がパニックになっているというのは恐ろしいと感じたからである。統治者は権力を持っているだけに社会的弱者は逆らえない。こういった混乱の最初の犠牲者になるのはいつでも弱者である。よって統治者のパニックによる暴走はあってはならないことであり、統治者が最初にパニックに陥りやすいというのは多くの人々にとって脅威になる事実だと思う。

この授業は私の考えに様々な影響を与えた。この授業はたくさんの学生の意見をみんなで共有することで、同じ問題でも多面的にみることができた。それは、より大きな可能性を生むのだと分かった。先生はよく「当たり前を当たり前と思わないことが大切」と仰っていたが、その言葉は私にとって耳に痛い言葉であった。以前の私は最初に普通ならこうだろう、と自分やその身の回りの価値観で物事を判断することが多かった。しかしそれは偏った見方であり、危険な考え方だと分かった。この授業で、まず「普通」という言葉に疑問を持つことができた。「当たり前」や「普通」ということに疑問をもつことは今までの自分にはないことだった。そういったことに疑念をもつことで一方的な見方に偏らず、様々な見方を取り入れることができ、より自分の考えを深めることができる。そのことに気づけたのが、この授業を受ける前と後の大きな変化であると考えている。

ちょうど、親友が帰省していた。彼女は宮城教育大学に通っている。3月11日に宮城に帰る予定だったが、私と買い物に行く予定を入れたため、帰る予定を次の日にずらしたのだ。県北から30分電車で揺られ、私たちは宇都宮に来た。久々の親友との時間。高校の時はいつも彼女(M)ともう1人(S)、それから私の3人でよくバカなことをした。「S おととい帰っちゃったからね。三人で遊べたらよかったけど。」そんなことを言いながら私たちは買い物を楽しんでた。買った赤い靴、途中あつくて脱いだモッズコート。

14:40。駅前ララスクエアの五階。プリクラをとった。「この後どうしよっか？」そんなことを言った時、私は言った「なんか揺れてない？最近多いね」

まるで車に酔っているかのような、何かのアトラクションに乗っているかのような、大きく横にゆーらゆーらしていた。次の瞬間、大きな縦揺れがきた。叫びわめく周りの客、倒れる商品棚。「落ち着いて！しゃがんで！落ち着いてください！！」思わず周囲のお客さんにむけてそう叫んだ。できるだけ低く、大きな声で。叫びながら、そして揺れが収まるまでの間、私はこんなことを考えていた。「あ、私ここで死ぬんだ。この建物がつぶれて、ペしゃんこになっちゃうんだ。お葬式の時、せめて私ってわかるぐらいであってほしいけれど。」オーストラリアの地震による日本人学生の被害が脳裏に浮かんだ。まだ新しいニュースだった。

揺れがやんだ。「なにこれ…」警備員に、その場から勝手に動かないように言われた。呆然とする中、隣のカップルの声が耳に届いた。「え？震源地宮城県だって！…！！うそ！！震度7！？！？」次の瞬間、私たちははっとした。「S 宮城！！」電話しまくっても回線が混雑していていっこうにかからない。友人が小さく言った「あたしの友達、今実家の石巻に帰ってる…」彼女とは一瞬電話が繋がったらしい。「どう？」「切れちゃった…周りが水浸しで、今屋根の上にいる。家に1人、どうしようって。そこで切れちゃった。」

私は冷静でいようとした。友人が取り乱さないために、せめて私だけでも冷静でいなければ。とりあえず周囲の人にけがをした人がいないか、商品棚の下敷きになってる人はいないか確認してまわる。また大きな余震。それが収まった時私は言った「外、出よう。」M「危ないよ！警備員さんもそこにいていったじゃん！」「見てよ。店員さんとか警備員さんの方がどう見てもパニックじゃん。ここにいっても、もしかしたらこの建物が崩れるかもしれない。でも外に出ても何かものが落ちて来て危険かもしれない。今ここにいるにしろ外に出るにしろ危ない。だったらあたしは外に行きたい。」

そうして、私たちは止まったエスカレーターを駆け下りて外へ。駅のコンコースにあふれかえる人、割れた街灯が地面に飛び散っている。駅員の誘導で駅の西側から東側へ避難。神に祈ることさえ忘れて、ただただ周囲を呆然と見つめながら駅員の背中についていった。

ただただ、待つ。何を待っているのかわからないが、待つ。電車が動かないというアナウンス。タクシー乗り場に移動する人の塊。寒くなって来た。脱いだモッズコートをまたきる。「きっとあたしんち崩れてんだろうな。お母さん、外出してたらいいけど。」

途中兄と電話が繋がった。勤め先の病院にいるとのこと、自分は無事だということ、落ち着いたら家に行くということ。その後、Mの両親が宇都宮まで迎えに来てくれることに。済生会まで歩いた。家

までの道、電気が回復している町真っ暗闇に包まれた町。不謹慎にも、真っ暗な闇夜に浮かぶ、さらに真っ暗な山や木々のシルエットに美しさを感じていた。

家に着く。深夜3時。家が建っていた。家に入る。自営業で酒屋を営んでいる店内は、商品の一升瓶が散乱していて、たっているだけで酔っぱらってしまいそうなおいだった。何も音がせず、光もなく、誰もいず。きっと避難したのだろう。それよりご近所のおばあさん大丈夫かな。そんなことを考えながら歩き出したとき、後ろから呼び止める声。母だった。車の中に避難していたのだ。父もいた。ラジオもついていて、毛布もあった。

それから1週間、電気も水も使えない生活だった。家にある蔵は半壊。栃木県の中でも被害が大きいと言われる矢板市であるが、自転車で市内をまわると、屋根が崩れ落ちている家や土壁のはがれ落ちた蔵が目立った。しかし、幸いにも親族、友人は皆無事だった。Sにも2週間後にやっと連絡が取れた。震災後印象的だったのが、海外に行った際に自分が日本出身だというと「東京か？広島か？それとも、福島か？」と福島が選択しに加えられていたことだ。まだまだ震災は終わっていない。被害の少なかった自分だからこそできることをこれからも模索しつつ、震災や原発の問題に関心を持ち続けていきたいと思う。

私は、大震災があったとき、宇都宮市内にいた。宇都宮大学に入学が決まり、母親と一人暮らしの部屋探しに来ていた。不動産屋の運転する車で一通り物件を見終わって、車から出た瞬間、非常に強い揺れに見舞われた。その場はひとまず不動産屋で仮契約をし、目の前にあった宇大のミニストップに入った。ウォークマンのラジオ機能で三陸地方が震源だったことを知り、実家が宮城県の南三陸町にあるのだが、とても心配になった。宇都宮でもこれほどの揺れだったのだから、宮城沿岸部ではかなり強く揺れたことだろうと思った。まさか、あれほどの大きな津波が襲来し、町があんなに見違えるほど壊滅的な被害を受けたとは思ひもしなかった。まだ危険かもしれないが、まずはどうにかして帰って、家族や友人の無事を確認しなければという気になった。南三陸町に帰ってすぐは、よく信じられず、まるで他人事のようにであった。だが、見慣れた場所や、自分の家がなくなってしまったあとを見て、ようやく実感がわいてきて、悲しいというよりは虚しいと感じた。

私は、この授業を通して、原発について知らなかった事実があまりにもありすぎて驚いた。これまで、福島から宇都宮にはある程度は距離があるし大丈夫だろうと、正直、高をくくっていた。だが、実際の数字を見たりして、政府が行った同心円状の距離からの指定の区域分けなど何の意味もないことが分かった。また、政府による大量の情報隠蔽が昔から行われてきたことがわかり、かなりの憤りを感じるようになった。しかも、その報道に対する反対の声も昔からあげていた人がいたということが分かった。もっと昔の人の声であったり、埋もれてしまっている声にも耳を傾けていかなければならないと感じた。

また、グループシェアも心に残っている。意外にも、被災した地域に住んでいる人が多かったことが分かった。しかもその人たちが、しっかりと震災に対して目を向けていて、同じ被災者ながら、感心してしまったのだ。もちろんなかには被災地域でない人もいたが、その人もしっかりと震災から浮かび上がってきた問題を考えてくれていて、とても心強いと感じることができた。

様々な人の発言や対応から、もしかしたら東北の人は遠い存在として見放され、自分たちだけでこれからがんばっていかなければならないのかもしれないと感じていたが、非常に嬉しく感じたのが心に残っている。

私が一番大きく変わったのは、被災地や震災を取り上げたニュースなどに目を向けようとするようになったことだと思う。これまでは、自分が被災したということで、現実から眼を背けようとしていたのかもしれない。あるいは、未だ南三陸町で仕事をしている父からの話を聴いて、知ったつもりになっていたのかもしれない。とにかく、震災の報道を避けてきたのだ。ところが、授業を受けていくにつれ、それでは本当のことは見極められないのではないかと思うようになった。放射能など、日本政府によって隠されていた情報が外国では明らかになっていたりすることもあった。自分の身を自分で守るため、震災のことを後世に伝えていくため、自分で情報を集め、また、報道なども本当かどうか疑わねばならないと考えるようになった。

1) 私は当時、宮城の実家に滞在しており、大学入学前だったため引っ越しの準備などを進めている頃でした。地震のときは祖父と二人きりで家でくつろぎ、のんびりとテレビを見ていました。3月11日の3日ほど前にも震度3の地震があったため、最初地震が起こったときは「最近地震多いな。」くらいにしかなりませんでした。しかし、一向に止まることのない揺れに対してこれはいつもの地震とは違うと分かり、何かに支えなければ立つこともできずひどく焦り始めたのを覚えています。地震が起こり、姉と祖母以外の家族と合流し、ふと外を眺めると大量の人が叫びながらこちらに向かってくる姿と、見たことのない汚く濁った水が町を飲み込む様子が目に入りました。生まれて初めてこのとき、自分の死を考えました。死を目の当たりにした人間の心はこんなにも大きな恐怖心にかかるものなのだと感じました。

2) 授業の中で鑑賞ツアーがあり、小原一真さんの写真展と資料を見る機会が私の中で最も心に残っています。小原さんは原発炉内で働く方々の心境や現状を私たちに教えてくださいました。自分自身、原発に対する政府の動きや原発の被害者の現況などはいくつも耳にし、目にしてきましたが、原発炉内の様子を知ることがあまりできないまま今まで過ごしてきたのだということをこのツアーで気づかされました。あまりにも過酷な彼らの仕事環境や彼らを支えようとする家族の心情そして、家族のことを思う彼ら自身の心情を知り、これは絶対に目を背けてはならないことであると感じました。被害者の目線からしか考えなかった自身の偏見はこのツアーで覆されました。加害者だと思っていた原発関係者の日々の努力に胸がしめつけられる思いにされました。このツアーが無ければおそらくこれからも考えなかった原発炉内の労働者の真実に触れることができたと感じました。

3) 自分も3.11の被害を受けた人間として、この授業を受講する前から3.11に対する思いは強かったです。しかし、この授業を通して自分の知らないことがあまりにも多すぎて衝撃を受けました。授業を受講する前は、数少ないメディアからの情報だけを頼りに震災の真実や震災後の状況を読み取っていました。また、大学入学後は自分の気持ちを落ち着けることに専念したかったため、わざと震災のニュースなどから目を背けていた期間もあったため、尚更自分の持つ震災の情報はほんの少しであったと気づかされました。自分の体験と少しの情報でこの大震災を分かりきったつもりでいた自分が恥ずかしく思えました。この授業では先生の見解も含めて、政府の対応や震災に対する人間の心理状態、過去の震災と比べることなど様々な面から震災を分析することができました。震災は恐怖と悲しみを撒いたものでとしか考えていなかった以前の私もこの授業を受講し、冷静に震災と向き合うことができました。このような未曾有の体験をしたことに対して、感情的になってしまうのは仕方のないことかもしれませんが、解決を導くためには客観的に物事を把握しなければならないことを考えさせられました。

1) 3.11 発生当時、私は、札幌に住む友人の所に遊びに出掛けていた。丁度地震が発生した時は米とぎをしていて、あと少しで終わるなあ〜という時に少し長めの横揺れの地震を感じた。震源地の確認をするためにテレビをつけると津波の様子や地震発生当時の様子が報道されていて宮城に住む家族や友人の安否が気になり繋がりにくい状態の携帯電話で必死になって電話を掛けていた。幸いにも家族に無事が確認できたことは良かったが、メールの機能が丸2日間使用できなかつたためにアルバイト先の職員の方々には安否確認が出来なかつたために多大なる迷惑を掛けてしまった。この震災を機に日々周囲の人と連絡を取ることや、小さいことでも報告する事の大切さについて考えた。

2) この授業で特に印象的だった授業はグループシェアの時間だ。偶然私が属したグループは1名を除いて宮城県、福島県出身の人が集まったため非常に深い話をする事が出来たからだ。私も宮城県出身だが、私以外の人の被災はとても深刻で、私の実家がある地域(加美郡周辺)も被災地なのだろうか?と改めて考えるきっかけをくれた。またこの授業で初めて時間をかけて震災の出来事や影響について語り合う事が出来たためとても貴重なものだった。震災について話すのに少し抵抗を感じていたが自分が思っていることやメンバーが思っていることを共有できてとても良かった。

3) この授業を通して私が考えていた震災についての考えが大きく変化した。この授業を受講してから私は震災についていかに甘くかんがえていたかを思い知らされた。震災直後はメディアの情報でも政府が行った会見ならば正しいのだろう。だとか、震災後に新幹線などが復活すれば、壊れた建物が直れば復興だろうと考えていた。しかしこの授業を通じて政府でも誤った報道をしていたことや全ての情報を鵜呑みにしないこと。どれが正しい情報なのか、どれが間違った情報なのか自分で判断していかなければならない事の重要性について思い知らされた。また復興は今でも進行形で完全に復興するには、建物の復活はもちろんだが、被災した人々が震災以前の様な生活が送れるようになった時に完了されるだろう。

1) 東日本大震災は、何だか半分夢のようだった。2011年3月11日、私は実家のある宮城県仙台市にいた。家族で祖母の家に遊びに行き、皆で食事をして少し落ち着いている時に地震は起きた。揺れ、声、音、はかばかする心臓と妙に冷静な頭というちぐはぐな自分—あの時の全ては、今でも鮮明に蘇る。ラジオを聞いて津波や火災の様子を想像した時の恐怖感も覚えている。この時初めて、テレビなんかの映像よりも想像の方がずっと恐ろしいこと、「見えない」ことの恐怖を思い知った。

地震が収まってからも、それまでの日常とは違うことがたくさん待っていた。挙げればきりが無い。私はそれらを経験した。経験したはずなのだが、なぜか夢のようなのである。あの時の記憶は、他の記憶とは異なる様相で私の中に存在する。無意識のうちに「消したい記憶」になっているのか、あまりに「非日常」であったためか。まだ自分では分からない。

同時に、全てが奇跡にも思えた。1年に1度あるかないかの家族全員が集まった時に地震が起きたこと、地震の数日前に祖母が防災靴を玄関に出していたこと、皆で食事をしていたからすぐに食べられるものがあったこと。そして何より、元気に生きていることが本当に奇跡的で、喜びだった。

2) 私がこの授業で最も印象に残っているのは、中谷宇吉郎(1958)『科学の方法』中の言葉だ。「全体の傾向から漏れた一つの例については、それがきわめて稀れなことで、ほんの誤差の範囲内と見られる場合でも、その例自身については、それは誤差ではない。99.9%は完全に適応できる場合でも、その残りの0.1%に当たった人に対しては、それは100%の誤差なのである。」

これを読んで、私はすぐにこれまでの人との向き合い方を思い返した。私も人も、他者の喜びや痛みをどれだけ分かっているのか、分かろうとしているのか。時に優しい言葉でさえも、他者を「例外」と排除する。その典型的な言葉が、「そんなささいなこと気にするな」である。この言葉によって、その人にとって100%の重大な悩みは0.1%にされ、それを気にしないこと、すなわち99.9%に同化することが善になる。

また、私は人を100%の枠の中で考えること自体にも疑問を感じる。99.9%と0.1%に分けると見えなくなることもある。99.9%の中の人も一様ではないし、分けるから0.1%になってしまった人が苦しい。全ての人が「100%」で、全ての人が「誤差」なのである。

3) 私は、本講義を受講する前には、地震直後の春休み以降全く震災に関わってこなかったことに罪悪感や劣等感を抱き、震災に対する感心が薄れているかもしれない自分に後ろめたさを感じていた。しかし、どちらの自分も認めたくはなかった。認めたら、震災に関わっていない事実と関心が薄れている事実も認めることになるからだ。しかし、本講義を通して、どちらの自分も「ああ、いるんだな」と存在を認められるようになった。グループシェアや皆のコメントの共有から、このような自分が必ずしも悪ではないと分かったからかもしれない。だからと言ってももちろんこのままで良いわけではないのだが、まず自分を受け入れることから全ては始まる。その意味で、本講義は「出発点」だったのかもしれない。

今回、西洋現代思想の講義を通じて、原子力や核の知ることのなかった危険な一面を知ることができました。福島で原発工事に携わる人の現実や、避難している人々の現状、被害の状況が写真等を通して、鮮明にイメージすることができた良い機会でした。

しかしながら、講義を通じて、講義以前から持っていた自身の根本的な軸となっている考えが変わることはなく、むしろ一層強固なものになりました。というのも、自分自身も基本的なスタンスが脱原発であったため、講義を通じて、原発に対する多くの異なる観点からの分析や考察を学び、ディスカッションを通して多くの人の貴重な体験談や、意見を聞くことができたが、最終的に自分が出した結論は、原発にはやはり反対であり、将来的な廃絶こそが日本が目指すべき道であると強く感じました。7月8日には、脱原発が趣旨であるイベントに参加することができて、日本が「トイレのないマンション」であること、現在、原子力発電所から出た有害物質を処分する術を日本は持っていないこと等、専門家から基本的な知識を学ぶことができたほか、脱原発デモをひた隠し続けるメディアの「異常」な現状を現地でデモ活動を行った人から直に聞くこともできました。

ディスカッションでは関西など、3月11日を被災地以外で体験した人の貴重な話を聞いてとてもよかった。震災以降、仙台から宇都宮に引っ越してきて強く感じていた意識の違いをディスカッション時に再確認できた。当事者でなければ本当の気持ちも、状況も理解することは難しく、関心を寄せることすらも地域によっては難しいということが分かった。私が仙台から宇都宮へきて受けたある種の衝撃の原因を少しだけでも知ることができたと感じた。去年、何もなかったかのように生活する周りの人々に感じていた違和感が、当講義のディスカッションで少しだけ晴れたような気がしました。

地元の宮城に戻ると、未だに震災の爪痕が生々しく残っています。復興のためのボランティアも去年と比べて大幅に減少しました。何も関係ない他人のために動くことなんてできないという人もいました。確かにその通りだとも思います。しかし、今や東日本大震災という原発による放射能の影響も含まれたこの問題は、日本国民全員が向き合わなければならない重要な問題だと思います。放射能はこの先何十年と、私たち子供の世代まで影響を及ぼします。原子力発電所が停止することによって、仕事がなくなる人や、電力不足の影響を受ける企業は多数あると思います。複雑な要素が複雑に絡み合うこの状況を把握することは簡単ではありません。しかし、人の命なくして、経済も何もないと思います。未来の子供たちのために、日本を変えようと動くのか、何もしないで眺めているのか、今選択が迫られる時代になっていると思います。どちらが正しいとか、どちらが間違っているとかはありません。人として、どちらを選ぶかということによって他人の決定を否定することはできないと思います。日本の「国民」が、今大きな一歩を踏み出し、騙し続けてきた政府・企業に立ち向かうときが来ました。政府・企業の黒い腹をよく知ることができ、脱原発に対する思いが当講義を通して一層強くなったと感じました。

忘れもしない2011年3月11日(金)、私は宇都宮のアパートにいました。旅行から帰ってきたばかりだったので荷解きをしたり、部屋の掃除をしたりしていました。突然、今まで体験したことのない大きな揺れを感じ、台所のほうから食器が床に落ちる音を聞きながら、今にも倒れそうになっている大きな鏡を必死に手で押さえつけていました。

やっと揺れが収まったと思うと、テレビの電源が消えました。震源はどこなのだろう…。調べようとして携帯電話を見ると充電が満タンだったことにすこし安心したところで実家、福島県浪江町の母からメールが届きました。家の納屋の外壁が崩れている様子を写真で送ってきて「おっきかったねー！家の中大変だー！かたづけしなきゃー！」と文面に書いてありました。しかし、その片付けはされることなく、今もそのままです。その時は家族が無事なことに安心をしましたが、その次に連絡が取れたのはそれから何日も経ってからでした。

一人が不安だった私は友人の家に行き、そこで初めて、原発について知りました。私の頭の中には地震があったときに原発を心配するような思考回路は存在していませんでした。「え、何がやばいの？」と、なにもわからず、それゆえに非常に恐ろしい気持ちでいたことを覚えています。そしてテレビがつくようになって、自分の地元の地名が出るたびに、びくびくしていました。

ことの重大さを理解し、春休みに旅行へ行く前に実家へ帰省しなかったことへの後悔が何度も何度も私を襲ってきました。いつでも帰れると思っていた場所に二度と行けなくなってしまうなんて考えもありませんでした。「帰りたい」「帰れない」あの日から何度この言葉を発し、耳にし、時に飲み込んできたのでしょうか。

「公害がおこって差別が起こるのでなく、差別が存在するところに公害がおこる。」授業の中で出会った、医師として水俣病患者に寄り添ってきた原田正純氏の言葉がとても印象に残っています。予見不能だから過失はないと言い逃れするチツソ、想定外だったという言葉で責任回避を図る東京電力。その背景に存在する政府、科学技術への期待…。水俣病と原発事故を比較してみると、たくさんの共通項が見え、まさに歴史が繰り返されていることが分かります。

原発事故の当事者となり、こんなことは二度と起こしてはならないと感じ、たくさんの人に原発事故の、原発避難の現状を知ってほしいとずっと思ってきました。知ってもらえば何かが変わると信じているからです。しかし、反原発デモが何回行われても、反原発の人が何人いても、日本の原発はまた動きだしてしまいました。原発事故から派生した問題は時間の経過とともに、解決されるどころかどんどん複雑になっています。教訓をいかすとか、二度と同じことを起こしてはならないとか言うけれど、結局、私たちがなにをしたところで、事態はなにも変わらないのではないだろうか。そんなことを思い、絶望的な気持ちになるときも、もちろんありました。それは、3.11を考えて、考え続けて、問題と向き合うことに疲れてしまっていたからかもしれません。でも、なにかを大きく変えることはできなくても、周りの友人、知人に小さな変化をもたらすことはできると思うようになりました。それは私の話を聞き、寄り添い、涙を流してくれる人が周りにはたくさんいるということをこの授業で気づいたからです。勇気を出して伝えれば、気持ちは相手に伝わり、相手の中きつとなにかしらの変化があるだろうと思っています。

1) 当時、私はアルバイトをしていた。地震が起きてからは近くの小学校に避難した。宇都宮市では停電が起こっていたため、帰宅後は必死で携帯やラジオから情報を集めていた。私は、中・高時代を福島県の楢葉町、富岡町で過ごしており、卒業後に地元である宇都宮市に戻ってきたところだったため、福島の友人に連絡を取ろうとしたが出来なかった。連絡が取れるようになったのは次の日のお昼ごろで、原発から逃げているとのことだった。その後、福島県南相馬市の友人が私の家に避難してくることとなり、当時の状況を詳しく聞くことができた。ガソリンスタンドに列が出来、食料品が町からなくなり多くの人が福島原発から出来るだけ離れようとしている現状から日本はどうなってしまうのか不安を抱き、栃木県から離れる必要があるのではないかと思うようになった。また、津波にあった町や原発事故から逃げている人々はどうなるのかと考える一方で、対応の遅い日本政府や情報を隠蔽しては隠しきれなくなる東京電力に対し、強い不信感を抱くようになった。

2) 印象に残った事象の一つ上げろと言われてもひとつに絞ることができない。しかし、どの事象にも共通して言えることは、権力を持つものが世界を支配し権力を持たない者がいつもそれに従わざるをえない状況にあるということである。水俣病や沖縄の米軍基地、原発や関東大震災後の朝鮮人など全ての事象には、社会が作り出した権力の構造によって問題や事件を解明されるどころか隠蔽され、存在しないものとされてしまう。そして、罪のない人がその犠牲となる。権力のあるものは決して自分が被害者の立場に立つことなど考えていない。そして、それがいつの時代も繰り返されている。こういった連鎖が一番印象に残っている。

3) 講義を受ける以前までは政府を批判し何が悪いかを考えるだけだったが、講義を受けて以来政府を批判するだけでなく、正しい情報は何かを見極めるための知識と判断力を養い、自ら行動していく必要性を強く感じるようになった。歴史を振り返ってみても、事実を隠ぺいし公表しない政府の対応は繰り返されており、多少の犠牲が出たとしてもそれを無視してしまう社会が存在していることが明らかである。そうなった場合に頼れるものは自分自身しかない。こういったことから、政府の流す情報をもとに一喜一憂するのではなく、多角的な面から物事をとらえ判断して行動できるだけの知力を養うべきだと感じた。また、自分の考えを多くの人と共有し政府や報道の在り方について共に考え、批判することで社会を変えていくための行動をするべきだと考えるようになった。今、国会の前で毎週金曜日にデモが行われているが、そういった行動をすることによって、国の政策に関心がなかった人々も目を向けるようになってきている。このように、誰かが考えたことをほかの誰かと共有しそれが連鎖することによって、社会を大きく動かす力になる。また、授業での討論をしたことによって、より強く人とのつながりの大切さを感じた。

1) 2011年3月11日、地震が起きたまさにその時、私は宇都宮大学構内のコンビニエンスストアにいた。生まれて初めて経験する立ってられない程の揺れに、思わず店の棚をつかんだことを覚えている。商品はいくつか棚から落下し、店自体も間もなく停電し、レジが使用不可能になってしまった。私の故郷は那須に近い福島県の西郷村というところで、宇都宮でこの揺れならば故郷も確実に揺れていると感じ、すぐさま家族に電話をかけた。無事連絡を取ることができ、取りあえず家族が無事だと分かって安心した。その日はたまたま宇都宮市内に実家がある友人と遊ぶ約束をしていたため、その友人と合流し、彼女の心遣いでご家族と一緒にいることが出来た。停電の中で何度も大きな余震を受けたあの夜に彼女のご家族と一緒にいられたことは本当に助かった。ゆっくり眠ることもできない恐怖の状況の中、それでも故郷の家族は無事だということを心の拠り所にしていった。だがその時の私は、福島県に迫っていた深刻な事態など知る由もなかった。翌日電気が復旧してその事実を知ったとき、家族は無事だという私を支えていた事柄が崩れてしまったため、絶望した。私の故郷は原発から80km圏外であったが、風向き関係で決して軽くはない汚染被害を現在でも受け続けている。それでも家族は私を心配し、何度も電話をしてお互いの生存を確認しては「お前が福島を離れていてよかった」と言った。その度、悔しさや悲しさ、やるせなさからくる涙をこらえるのに必死だった。家族に見つからないところでは何回涙を流したか分からない。家族が子どもだけでも無事でいてほしいと思っているように、私も家族だけでも安全でいてほしいと思っていた。そのたったひとつが無残に奪われた悔しさや悲しさから立ち直ることがどうしても出来ず、未だに完全には立ち直れていない。

2) この授業で印象に残っていることは、学生同士で意見交換会を行ったことである。学生を数人ずつのグループに分けて、1)で述べたような内容を互いに言い合ったのだが、たまたま私が参加した班は1人を除いて全員が被災地の出身であった。一言で被災地とくくられてしまうが、被災の程度や現在置かれている状況はそれぞればらばらで、被災地とひとくくりにしてしまうことの危険性も分かった。また被災地以外出身だった1人は、やはりこの震災で被災した人々がどういう状況であったかということや、1年以上が過ぎてもなお苦しんでいるという現状をどこか現実味のない感じで捉えていたようで、我々が置かれている状況を知って心を痛めていたようだった。勿論被災状況を実感できないことは無理もなく、その方がそうした率直な意見を仰って下さったことによって、地域による意識の差等を知ることが出来た。互いの置かれた状況の差と、それぞれの意見を知ることが出来たため、非常に有意義且つ印象に残る会であった。

3) この授業を通して、原発に対する気持ちが感情的なものから理論的なものになっていった。私は1年以上も原発に関することを感情的に捉えており、それがあまり賢いやり方ではないことも分かっていたのだが、家族を想うあまり自分では制御することが出来なかった。だがこの授業を受けていくうち、自分で様々な観点から情報を集めて分析していくことにより、理論的に自分の意見を固められるようになった。しかしそれでも私の気持ちは脱原発で揺らぐことはない。理論的に意見を組み立てていくうち、電力は人間の、そして家族の安全を犠牲にしてまで手に入れなければならないものではないと改めて実感したからである。そしてこれが感情的な意見ではないと自覚しているため、今、私は胸を張って、私自身の意見を言うことが出来るようになった。

1) 2011年3月11日、私はインドにいた。インド人女性の職業自立支援を中心に活動している、リソース・ネットワークという団体の活動の一環で、インドを訪問しているときであった。ちょうど3月11日にインドを出発し、12日には帰国する予定であったが、大地震と大津波の影響で日本への便は飛行が延期され、私たちは香港で足止めされることとなった。

インドでは現地の人から「日本が地震で大変なことになっている」、「JAPAN,TSUNAMI! TSUNAMI!」としきりに声をかけられたが、しばらく確かな情報が得られずあまり信じていなかった。現実を目の当たりにしたのは、空港に着いてニュースを見てからである。いくつもの家屋があつという間に濁流に飲み込まれていく津波の映像が放送されており、これが日本で起こっていることだとは信じられなかった。ただならぬ危機感と恐怖、途方もない不安を抱いた。

私の実家は福島県にある。インドからも香港からも国際電話で実家に連絡をしたが、当然繋がらなかった。まずは家族、親戚、友人の安否を心配するだけで、この時はまだ原発事故のことなど少しも頭になかった。幸い、家族も家も無事であった。しかし、福島県第一原発の事故がこの先もずっとついて回ることとなる。「福島は終わった」、私はそう思った。現在もそう思っている。

2) この授業の中で印象に残っているのは、やはり受講生同士でディスカッションを行ったことである。私は3.11以降、この震災の話をするのをなるべく避けてきたし、人の話もまともに聞いてこなかった。授業を通して、自分以外の人たちが当時どうしていて、何を感じ、何を考えていたのかを聞くことができたのは、非常に貴重な体験であった。

上述の通り、私は地震発生時日本にいなかったため、その揺れを体験していない。みんなの話を聞いて「死ぬかと思った」という人や、「震源から遠い所にいて特に被害は受けなかった」という人など様々で、一人ひとりの体験は私にとって新鮮に感じられた。

私の家族は今でも原発から80kmほどの場所で暮らしおり、幸か不幸か避難には至っていない。一方原発付近に住む人々は更なる被害を受けている現実から、私は当事者意識と被害者意識、そしてどこか後ろめたさや遠慮のような気持ちの間で葛藤し、苦しんできた。このやり場のない感情を、誰かに打ち明けることができたのも貴重であった。もやもやはずっと付きまとうが、自分の中で以前よりこの震災と向き合おうとすることができたように思う。

3) この授業を通して私の中で変わったことは、この震災と向き合おうとする気持ちの変化と、今まできちんと知ろうとしてこなかった原発について考えたことである。原発が、いかに危険でいかに恐ろしいものであるのか、講義や配布された資料、映像、書籍から今さらながら実感した。

起こってしまった現実をいつまでも避けることはできない。いまだ残る地震や津波の問題、瓦礫の問題、原発事故による放射能問題、避難の問題、原発再稼働の問題、とにかくたくさん問題がまだ山積みであるが、ひとまず現実から目を背けない努力をしようと思う。

1) 私は、3月11日の大地震の時、福島県の会津地方にある実家にいました。当時、受験生だった私は、宇都宮大学への合格を決めていましたが本命の大学の試験を一週間後に控えていたために受験勉強をいつものようにしていました。地震が発生し、また福島原発から放射性物質が漏れているという報道も耳に入るようになりました。福島県の町や村が避難区域に指定されていく中、遠く離れてはいましたが、自分の町もそうになってしまうのではないかとという大きな不安に悩まされました。放射性物質も風向きによっては飛来してくるなどテレビでの専門家の話を聞くたびにどうになってしまうのだろうかと感じていました。しかし、私が一番に気にかかったことは、その試験の会場でした。仙台市内の施設で行われる予定でしたが被災したために急遽、東京の会場に変更されることになりました。当時、各地でガソリン不足が起こっていましたが、福島から東京までの交通状況も定かではなかったため、自家用車で会場に行くことが不可能になりました。どうにか回り道をしながらも電車や新幹線乗り継ぎ、東京にたどり着くことができましたが、避難のためか東京の様々な駅では、今まで見たこともないほどの人でごった返していました。乗車率も200%を超えるのでは、というほどで多くの乗客は狭い車内でつらそうな表情をしていました。しかし、私は自分自身の試験ばかりに頭がいっぱいで、避難する人のことなど考えている余裕もありませんでした。

2) この授業で一番印象に残ったことは、ほかの学生の皆さんと震災についての意見、考えをシェアすることができたことです。その時や場所、状況に応じて、思うことはさまざまであり、私の住む福島県外の方々がどのように思っているのかということは、前々から興味を持っていたのでとても有意義な時間を過ごすことができました。その時間、特に興味深いと思ったのは、沖縄県出身の方のお話でした。東日本では、大きく話題となり、人々でも関心を抱かなかったほどのトピックだったのにも関わらず、沖縄のほうでは人々の間でそこまで大きな話題にはならなかったということです。確かに沖縄すべてではなく、一人の方のお話では全体がそうであるというわけではないと思いますが、少し驚いてしまいました。しかし、よくよく考えてみるとそれは、私たちにも当てはまることであることに気づきました。確かに私たちも沖縄米軍基地の問題がとても大きな問題であるのに、日常生活においてはさほど注目もしていませんでした。向こうの人から思えば、私たちが米軍基地問題にそれほど関心を持たないことも驚くべきことなのだろうと思います。離れた場所で起こったことは、どんなに深刻でもそこまで注意されないということを知りました。

3) この授業を通して、地震に対する考え方は変わりました。前述の通り、私は、試験直前のことだったため、地震に対しては私の大学入試をめっちゃくちゃにしたものであるというように考えていました。つまり、自分中心に考えてしまっていたのです。しかし、この授業を受講し、東日本大震災とそれに伴う様々な事故や現象の事例を見ていくともっと深刻な被害を受けた方々がたくさん存在することを知り、自分の受けた被害がいかにちっぽけだったかを感じるとともにいかに自分が東日本大震災について知らなかったかを思い知らされました。この大災害から学ばなければ、我々はまた同じような過ちを繰り返してしまうでしょう。東日本大震災についてさらに知り、まだ知らない面についても探求したいと思いました。

1) 東日本大震災が発生した、2011年の3月11日、私は栃木県の宇都宮市内に居ました。その頃、塾のアルバイトをしていましたが、ちょうどその日は栃木県の公立高校入試合格発表日の日だったので、午前中は塾に行っていました。子供達の結果に一喜一憂して、笑い、泣いたりし、感情的な午前中でした。そして午後、塾の先輩とご飯を食べていた時に震災に遭いました。最初は揺れが小さな程度だったので、よくある小規模の地震だと思いました。しかし揺れは収まらず、次第に強くなっていき、天井の照明の電気が消え、テーブルの上のお皿が動きました。あまりの揺れの大きさに生命の危機を感じました。この日は、午前中から午後まで「感情の揺さぶられた日」だったと思います。

私の出身は福島県会津若松市ですが、宮城県の隣県であり、同じ東北地方であるので、家族は無事でしたが東北の人々が被害に逢うことが非常に衝撃的であり、人ごとには捉えられませんでした。地震や津波の被害に関しては、抗うことのできない自然の恐ろしさを感じました。原発事故に関しては、地元民が犠牲になっているという気持ちを持ちました。一体なぜ、福島県民が犠牲にならなくてはならないのか。安全だと公表していながら、なぜ原発事故が発生したのかと疑問に思いました。この震災で、幸運にも身内は被災しませんでした。しかし、同じ東北人が被災しているという状況に、心を傷めずにはいられませんでした。

2) 「3.11の企画展示」が最も印象に残りました。今まであまり地震に関する本を読んだことがなかったので、昔から日本が、多くの地震と向き合ってきたということに初めて気づかされました。地震の年表を見ると、記録されているだけでも各地で頻繁に大きな地震があったという事実が明らかでした。しかしながら、東日本大震災のような地震は日本観測史上最大であり、世界で4番目の巨大地震であったということから、「前例」を前提に、安心していただ私たちの暮らしを非常に危うく感じました。今ある現実が奇跡的であり、何でもない日常がどれだけ幸せであるかということも感じました。さらにこの展示を見て、地震に限らず、自分で探し、調べれば多くの本があり、事実が発見でき、物事を理解する力を身につけられるということを実感しました。マスメディア等の不確かな情報、偏った情報を鵜呑みにせず、確かな情報を自分自身で獲得し、自分で考える必要性を理解しました。

3) この授業を通して一番変わったことは、情報の真偽を「本当にそうだろうか？」と冷静に疑うことを知ったということです。原発事故に関して、当時の私はマスメディアの情報に流されていました。自分で疑うことをせず、聞いたことをそのまま理解していました。しかしその情報には信憑性のないもの、嘘も含まれていました。震災が起こる前に、原発の危うさを説いた本は間違いなく存在していました。受動的に情報を受け取るのではなく、主体的に情報を獲得することで、初めて疑う力が養われ、問題の本質を明らかにすることができるということはこの授業で学ぶことができたと思います。

1) 東日本大震災が起こった 2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分、わたしは自宅のある茨城を離れ、サークルの集まりで宇都宮大学のCOMMONルームにいた。船の上にいるかのようなゆらゆらとした揺れが続き、次第に不安になったので全員で外に出た。つながらなくなった携帯電話や麻痺した交通網、東北に実家のある先輩の蒼白な顔が「何かが起こった」という実感をもたらしたように思う。当然電車が止まり、帰れなくなってしまったので宇都宮在住の友人の家に行かせてもらうことになった。その後話し合い（地震発生後も継続していた！）が終わり、彼女の家に行ったが留守のうえ電話が繋がらない。落ち着こうと思って入ったミニストップでは店員に締め出され、携帯を握りしめて湧き上がってくる恐怖と孤独感を必死に押さえつけていたのを覚えている。結局友達と落ち合うことができ、そこから水道とガスが生きていた別な友人の家に移ったのだが、誰かと一緒にいるだけで本当に心安らかな気持ちになれた。本当に感謝してもしつくせない。

翌日起きたらテレビがつき、ひたちなかの海沿いで大量の自動車が炎上している映像が目に飛び込んできた。地震だけでなく津波による被害も甚だしく、あちこちで火事が起きていることに初めて気づいたが、何か映画を見ているようなぼんやりした感覚になった。とりあえずこの時は「どうやって帰ろう」ということしか頭になかった。実家に電話が繋がったのもこの時で、こっちは水が出ないからお風呂入らせてもらいなさい、という会話をしたように思う。結局その友人宅には 2 泊し、復活した電車で途中駅まで行った。迎えに来てくれた母の顔には疲労の色が濃く、娘の身を案じているそぶりはあまりなかったし、帰宅すると、私の机の片づけが大変だったと妹に文句を言われた。ひとりだけ遠くにいたことがどれほど不安だったかが分かってもらえなかったことにショックを受けた。

原発事故が起きたのは友人宅にいる時だったが、ニュースで詳細を見たのは家に帰ってからだった。庭に植えてあるハウレンソウも、外に出ていく飼い猫も、窓を通過して吹いてくる風も、なにもかもが「放射能」のみえない恐怖にさらされている気がしてこわかった。しばらく外に出られなくなる。過剰な反応が家族の反感を買ったが、なぜあんなに恐怖を覚えたのかはいまだにわからない。

2) 先生がただ報道に対して怒るだけでなく、悪い部分の根拠を一つずつ示しながら説得力のある説明をしていたこと。反論するには相手を知らなければならないことを実感した。

3) 原発について、なぜ要らないのか・どのように危険なのか・造る意義があったのかということに関しては、それまでとは 180 度見方が変わった。また、それまで政治家に対して抱いていた偏見が、はっきりとした根拠を伴う批判に変わった。感情的なことではないが、理由を持って客観的に「ダメなんだよ」といえるようになったと思う。考えが変わったというより、今まで不安定だったもの（考え方、知識）に根っこを与えてもらったといったほうが正しいかもしれない。そういった意味で、得るものが多い充実した授業だった。

1) 三月十一日大震災が起こった日私は水戸のマンションにいた。そのときちょうど茨城県立図書館に行こうとして出かけるところだった。しかし、靴をまだ履いてないうち、地震の揺れが始まった。また小さい揺れか、そう思っていた。水戸市の地震は高が一月1-2ぐらいゆるめな揺れなので、怖がるより私は3.11前ずっと好きだった。私にとってまるでゆり籠のように揺れていたから。そう思っていたところ、その揺れはいつもより長く揺れていた。さらに揺れが大きくなって、そんな大きさは二年間一度もあつたことない、怖くなって、慌ててトイレに入った。さらに大きくなって、猛烈に左へ右へ揺さぶられていた。つけた電気がすべて消えて、あれ？停電した！恐ろしくて外に一刻も早く出たくて、しかし動く力も失って地震によって揺さぶられて出られなくなった。食器なども倒れてしまって、干し物でさえも倒れて、やばいなあ。。。どうしよう、ここでこのまま閉じこめられたまま死んじゃうのか、頭も真っ白、何のアイデアも思いつけなくなった。恐ろしくて、早く止めて早く止めて、止まったらすぐ外へ逃げ出すことができるだろうといった念願が強かった。やっと止まった、二度とこの家に戻れないか。。。そう思い込んで慌てて単にパスポートを取り出して駆け足で外へ出た。知り合いと出会って、「先怖かったですよ」と話しかけてきた、「うん」って答えて語学学校に走って向かった。学校にいた途端、そういう苦痛な経験をしたのは私だけではないことがわかった。みんな慌ててサンダルのまま学校の入り口で集めていた。友の大切さはそのとき意識した、人と人の間の絆は一層強かった。その日は災害を経験した人にとってはいつもより長くて寝られなかった。日本に留学しに来て本当にいろいろなことを経験したなあ。。。いろいろな子と初めて出会ったり、経験したりして、大変苦労した。とはいえ、歯を食いしばりながら生きることが大切だ、トンネルの先の明かりがきつといつか見えてくると信じているから。

2) この授業の中で、最も印象に残ったことは東京裁判で、もともとA級戦犯だった人がアメリカのABCCと協力、放射能被ばくの研究のため、残念な手段で犯した罪も問われなくなったなんて、ぞっとした。またチェルノブイリ事故で、民族浄化の故に引き起こされた虐殺から逃れるために、立ち入り禁止区域に入り込んだ人たちがいた。その二つのことはいずれも人に恐ろしさを与え、最も非人道のことと繋がるのだ。だけど、強者であれ、弱者であれ、人は生存できる限り、自らの命をたかが一日しか伸びなくても、逃げる道があれば、どんな不適切な方法、危険な道を選択しても悔やまないと思う。

3) 貧困格差が縮まらない社会において、弱者は人に差別されたり、偏見されたりする現象がよくよく現れるけど、唯一の味方は国または政府だと思っていた。政府は常に貧困者、特に失業者にいろいろな交付金や補償金を与えている、大学に通っている子供のいる家庭に、援助あるいは学費全額免除をやっけてあげる。その実情は社会主義と称する中国において2005年から現れた現象だ。民主主義国家日本ですら今度の事故によって、また前のいろいろなことと繋がって、政府の「棄民政策」をさらけ出してきた。ひょっとしたら母国も、、、。何れにしても、人は自分自身のことを守ることは最適だと思う。

1) 3.11 が起きたとき、私は地元（千葉県成東市）の友人の家に行った。部屋でゲームをしているときに地震が始まり、最初は「あ、地震だ。」くらいに思っていたが、だんだんと揺れが大きくなり、今までに経験したことのないような揺れを感じた。友人の家の廊下にあった棚が倒れるなどの音もして、パニックに陥ってしまった。揺れが落ち着いたあと、あらゆるライフライン（電気や水道）が止まり、ラジオからの情報しか得ることができなかった。また、電車が止まってしまい、家に帰ることが出来なかった。友人宅に泊めてもらうことになった。ラジオからは地震の規模が甚大であること、大津波が起きて町を飲み込んだことなど、音声の情報だけでは想像しがたい内容で現実味が湧かなかったが、繰り返し言われる「未曾有」という言葉が強く印象に残った。電話は回線が込み合っていて、母親に連絡がつかないことが心配であった。翌日、バスが動き始めたのでそれで実家（千葉県八街市）に帰った。駅の近くのコンビニに寄ったとき、あまりの品物の少なさに驚いた。そして、自分も何かしら買わなければという思いになって、飲み物と食料をいくつか買った記憶がある。

2) 印象に残っているのはディスカッションである。地震のとき何をしていたか、という話はあまり交わしてこなかった自分にとっては衝撃の連続であった。私は千葉の内陸にいたので、あまり大きな被害を受けなかったが、より大きな揺れや津波に襲われた地域のひとの生の声を聞いて、今回の 3.11 の悲惨さや現在進行中であるという事実を再確認させられた。また、同じ大学生であるみんなが、今どのような考えで過ごしているかを聞くことで、震災に対する考えを今一度考え直すいい機会になった。

3) 私は今まで、震災や原発事故に対して、真剣に向き合ってこなかったように思う。しかし、講義を通じて知ること・考えることの大切さを学んだ。事故が起きてから原発は危険であるとは思っていた。しかしそこにはなんの知識もなかった。この講義で、ではどう危険なのか、またどういった構造で原発が存在するのか、どうして原発がなくなるのか、などといった原発を取り巻く多くの問題に触れ、知ることができた。そこには信じがたい事実や、日本が抱える病も見えたように思う。私たちは日本にいる以上、原発に関わっている存在として、原発について考えてなくてはならない問題である。様々な文献や、情報を見比べて原発について考えることをやめずにいようと思った。そして、自分の行動を、自分で調べ考え抜いた答えで選択していきたいと強く思った。

1) 3.11 のその日、私は家族旅行で千葉に出かけていた。そしてトイレ休憩のためによっていた店で、3.11 の大地震を経験した。揺れは店ごと揺らすものであったために急いで外に出たが、揺れは長く続いたようにも感じた。しかし駐車場にあったポールに捕まっていた、更には見慣れない景色だったために、いつもより大きい地震という認識しか持ち合わせていなかった。そのためすぐに出発し次の目的地へと向かったが、車中カーナビでテレビを見ていると先ほどの地震の震度が思っていたよりも大きいことや、津波が迫っていることが分かった。そして少したつと津波が港や町中を襲う様子が映し出され、これは只事ではないと感じ、茨城県にある実家に帰ることになった。家族全員は揃っていたため家族の安否は確認する必要はなかったが、親戚や（特に東北や太平洋岸に帰省している）友達の安否が気になった。そして帰路の最中には、千葉コンビナートのガスタンク爆発を目撃したり、道がひび割れていたり、信号機や街灯がつかなくなったりと非日常的な出来事を経験したため、これは大丈夫なのだろうかという漠然とした不安をずっと抱えていた。またあまりにも唐突な出来事だったために、別世界のような、実感が無い状態であった。

2) この授業の中で印象に残っている点は田口先生の授業はもちろんだが、それに対しての受講者達のコメントが毎回発表されたことである。先生の授業に触発されたように受講者それぞれが、しっかりと意見をもち、また事象に対しての分析を行った。他の授業でもコメントを求められることはあったが、先生が毎回コメントをプリントで配布し共有させ、更にもその考えを発展させようという試みは他の授業ではなかったことだった。田口先生が選んだコメントはどれも鋭く問題提示をしていたためとても刺激になったし、様々な人の意見が聞けて楽しかった。また毎回行われたこのコメント発表では田口先生の意見も聞けて、より広い視野で授業に臨むことができるようになったと思う。

3) この授業を通して、以前よりも強く原発という存在について考えるようになった。授業を受ける前は、私は原発に対して漠然とした嫌悪感があるだけであったが、現在では原発反対の立場である。反対派が必ずしもいいというわけではないが、社会的問題を自己の判断によってしっかりと判断できたということが、大きく変わったことであると考え。またある問題を考えるとき、その情報源をひとつに絞らず、できる限り多角的に見ることが大事であるという認識を持つようになった。もし今度何か問題を考えることがあれば、その問題についての知識もそうだが、それ以外の付随した事柄についても調べるのが大事であると感じた。

1) 私は東日本大震災が起こったときは、運よく祖母と栃木県那須塩原市の家にいた。大学受験が終わったので一息つき、好きな本を読んでいたら地震が起きた。高いところのものが落ち、物が倒れ、壁に少しひびが入っていたが、大した被害はなく、東京に仕事に行っていた父を含め、家族は全員無事だった。

発生直後は地震の大きさにただ驚くばかりで、原発がどうなっているかまで考えが及んでいなかった。テレビをつけてはじめて、地震や津波の被害の深刻さを知り、愕然とした。人間が作り上げてきたものを一瞬で消し去ってしまう自然の力への畏怖や、人間の生と文明に対する虚しさを漠然と感じていた。また、自分が今まで原発の危険性に関して無知で、それほど問題意識を持っていなかったことを実感し、反省した。加えて、政府が情報を隠していたことが立て続けに明らかになって、私たちが見聞きする情報が何らかの意図によって手が加えられたり、切り取られたりしているのだということをこれほど強く実感したことはなかった。何を信じていいかわからなくなり、怒りも覚えた。

2) 第1回講義で学んだ、中谷宇吉郎の「99.9%は完全に適応できる場合でも、その残りの0.1%に当たった人に対しては、それは100%の誤差なのである。」という言葉が印象に残っている。今回の大震災で、政府がある枠組みから外れた人を無視し、世間はそのような人たちにあまり関心を寄せていないことを感じ、弱い者が犠牲になる社会のシステムをはっきりと意識したからである。現代の日本社会では、国民は0.1%を例外として関心を寄せず、政府も0.1%のために99.9%という大部分の調和や平和が乱れないように、一般から逸脱したケースを見て見ぬふりをし、犠牲になっても「仕方がない」という態度をとっているように思える。

3) この授業を受講して、原発に反対する気持ちがさらに強くなった。しかしそれ以上に、今回の大震災から地震や原発についてのみ考えるのではなく、公害、戦争、沖縄の基地問題、日本の民主主義などのほかの問題まで考えを広げていくようになった。3.11は日本社会の様々な問題を次々に浮き彫りにしていったように思う。そして、自分がニュースなどで取り上げられる表面化した問題ばかりを追って、あまり取り上げられない問題について深く考えていなかったことに気がつかされた。毎回のコメント集は、様々な人の意見を知り、こんな考え方があったのかとはっとさせられたり、よく知らなかったことが取り上げられていて勉強になったりした。先生のお話や同じ授業を受講している人たちのコメントは、毎回刺激になり、自分の視野を広げてもらった。

3.11の被害は収まるどころか現在も増幅している。これからも3.11の記憶を風化させず、真剣に向き合っていきたい。

1) 2011年3月11日の震災時、私は宇都宮駅周辺の飲食店でアルバイトをしていた。休憩していたプレハブ小屋が倒壊するのではという揺れが起き、急いで外に飛び出したのを覚えている。その後交通網が機能なくなり駅前是一時騒然となったが、一方で人々の様子や行動が非常に冷静だったことが印象的だった。自宅のある鹿沼市に帰宅した後真岡市から親戚が一時避難に来るなどし、また近隣に比べ被害が少なかった鹿沼市は原発事故の影響で福島県から町全体で避難してきた住民を受け入れた。原発事故に関しては、震災後1ヶ月ほどは加熱する報道に煽られるようにして日々不安を感じていた。しかし時間が経つにつれて慣れも生じ、自身の中で震災が確かに風化しているのを感じた。この風化と、震災に関して自分の周辺という限られた視点でしか捉えられていないことに対し「このまま放っておいてよい問題なのか」という思いを強くし、本授業を履修するに至った。

2) 震災に関連するさまざまなことを学んできたが、最も印象に残っているのはやはり原発についてであり、とりわけ「脱原発」という考え方である。講義で取り上げる資料、文献、また個人の意見といったものの多くが「原発は不必要」「日本は脱原発を進めるべき」という言説だったように思う。私がそう感じた大きな理由は、私自身がこれまで「原発は廃止すべきだ」という考え方にそれほど注意を払ってこなかったことにある。確かに原発のリスクは楽観視しすぎていたが、政府や東電、マスコミの情報のみを得ていた私は「それほど大きな問題ではないのでは」と考えていた。結果的にそれが情報源の偏りによる根拠のない錯覚だと気付くことができ、メディアリテラシーを身をもって学べたこの授業は私にとって非常に意義深いものであった。

3) 脱原発という主張が強く印象に残っているものの、この授業を通して私の考えが明確に原発反対という姿勢になったかといえばそうではない。原発事故の実態から今後の影響までを考え、そのリスクの大きさに原発信仰が幻となったことは確かである。しかし原発は必要ないと断言するのは、授業を終えた今でも私にとって難しいことである。その理由は、原発全廃を日本が実現したとして、そのことによって起こる新たなリスクに対する確かな対応策や代替案が未だに見出せないためだ。単に今起きている危機、また今後予想される危機を回避したいがために脱原発を主張するだけではあまりにも短絡的である。授業内でも脱原発を実現した際のエネルギー政策について言及していた。そのことについて掘り下げ、そこに原発の代替策としての可能性を見出すことで、原発に対する批判だけでない将来の日本を考えた意見を持ちたいと思う。いずれにせよ、授業を通して震災を自分の身の回りに起こった出来事からしか捉えられなかった状況からは脱することができた。広く日本全体や人類にまで及ぶ広い視点から3.11を考えられたということは非常に大きな変化であった。

1) 私は、地震発生時は宇都宮の一人暮らしの家にいました。大きな揺れが来た時は、怖くて何もできませんでした。揺れがおさまり、急いで学校に避難しました。そこで数人の友達と会い、みんなで友達の家に集合する事にしました。停電が起き、揺れがまた来る恐怖から、皆一緒にいたがりました。電気が止まってしまったので急いで食料とろうそくを買いにコンビニに行きました。コンビニは、近所の人々であふれており、何もなくなっていました。みな混乱していて、とりあえず食べ物と飲料を大量に買っていました。私も何か食べられる物を買って友達と過ごしました。夜は、暖房器具もなく、電気もなく寒く不安な気持ちになりました。さらに、テレビもつかなかったので何が起きているのか分からない状況で、とても怖かった気がします。宇都宮は幸い、1日で、停電は解消されこのような恐怖はすぐ終わりました。テレビをつけてみると東北地域の津波の映像が目に入ってきました。津波の映像はとても衝撃的で、この映像は日本ではないと感じました。更に携帯もつながるようになり親から連絡がきました。私は、出身が静岡であり、今回の地震の被害はありませんでした。そのため、母親が心配し、落ち着いたら静岡に帰ってくるようにと私に言いました。福島原発の事も心配していました。その後、すぐに帰りました。静岡は、地震の影響は何もなく、別世界に来たようでした。しかし帰る途中、静岡にある浜岡原発デモに会いました。その時は、特に原発について詳しくなかったので、「またやってる」と思いながら通り過ぎたのを覚えています。そのあとは、学校が始まるまで静岡ですごしました。

2) 一番印象に残っているのは、少人数で行ったディスカッションである。同世代の地震当時の自分の行動や気持ち、原発に対する考えを聞いた。また、自分も発言するにあたり、地震や原発に対する考えを再認識する事が出来た。みな共通していたのは、地震、原発と高い意識をもち、自分も何かしたいという気持ちが強かった点である。また、被害を大きく受けた、東北地方の人の実体験を聞く事は貴重な体験であった。

3) 今おかれている現状を疑うという姿勢を強くもつようになった。本授業を受講して福島原発の問題、オスプレイ配置、公害などなぜ起きたのか、何が問題なのかを深く考えるようになった。特に原発問題は、高校受験時の暗記事項として原子力発電という言葉を手紙に覚えていただけであった。しかし、原子力発電には、多くの問題が内在していた。また、東電の企業体制、政府の問題処理に対する姿勢などの問題も存在している。

このような問題をただ受け流すのではなく、自ら積極的に疑い様々視点に立ち問題点を考えるようにしていきたいと強く感じた。

1) 栃木県内の出身高校で卒業生による講演会があり、学校へ行き、2階の渡り廊下を歩いているときに初めて揺れを感じました。初めは渡り廊下だったので、風が強いなあ、としか思っていないでしたが、次第に強い揺れになり、立っているのが怖くなりました。揺れの強さで防災扉が閉まり、急いで集合場所にいました。その後、在校生、友人、先生方と校庭に避難しました。その時はまさか大地震だとは思っていなかったため、「ガチの避難訓練をやる日が来るなんて」「家や家族は大丈夫かな」と友人らと話していました。栃木県内にいたということもあり、津波や原発のことを全く考えていませんでしたし、停電していたためテレビの情報を見たのは2日後で、その時に初めて震災の大きさを知りました。まず自分の周りの人たちの無事に安堵し、東北の人々について考えたのはそのあとでした。東京にいた姉から「有害の物質を扱う工場が地震の影響で壊れたから、外にできるだけでなくて、肌の露出を控えなさい」という連絡がきました。その時はただのチェーンメールだと思っていましたが、今考えると福島原発の放射能のことだったのではないかと思います。

2) この授業で1番印象に残っているのは、グループシェアをしたことです。普段はなかなか聞く機会のない話で、津波の被災にあった方や、石油コンビナートが爆発するのを直接見た方、液状化の被害にあった方、警戒区域内に地元がある方など多くの人の貴重なお話を聞くことができました。メディアを通して聞くよりもはるかにリアルで、メディアには流れない話も聞くことができました。話を聞く中で、自分自身がどこか他人事のように思っていたことに気づき深く反省しました。また、私のグループは女性のみだったために出産や育児など将来の不安についての話が出ました。自分だけでなく、皆同じような不安を持っていて、私たちにとっては未来のことだが、今現在もそれに悩む人がいるということを再認識しました。

3) この授業は私にとって自分を見直す良いきっかけになり、学問をすることの意味や物事の見方、メディアとの付き合い方など多くを学びました。原発については、知らないことが多く、以前は小中学校で福島原発に見学に行った時に聞いた安全性や地球環境にやさしいということを疑いもなく信じきっていたため、原発の稼働に関して問題視することはなかったように思います。しかし、今は原発稼働に絶対反対です。原発があることのメリットを考えても、安全保障のない原発は必要ないと思っています。現に国内の54基の原発が停止しても電力は足りていました。ただ、原発の恩恵を受け生活していた人がいるのも事実であるので、難しい問題であると感じます。

1) 3.11 の地震発生時、私は栃木県の自宅にいた。両親と私はそれぞれ別の部屋にいたのだが、普段の揺れとは全くの別物であると気づいてからすぐ外に避難した。外で見たのは電柱や車や窓ガラスの揺れる様子、近所のおばあちゃんが街路樹にしがみ付いている姿、同じく外に避難していた人たちの呆然とした表情だった。そのすべてに、今体験していることが非日常的な出来事であることを実感させられ、漠然とした恐怖と焦りを感じた。自分の日常が壊れてしまうような気がしたからである。また、揺れが激しくなって物が落下し始めたときには部屋の様子を見ている余裕は無くわからなかったのだが、揺れが止んで中に戻った時の家の中の状態にはとても驚いた。私の家は幸い壊れたものは無かったが、家具や電化製品は置いてあった場所から大きくずれており、棚という棚からは物が落ちて床に散乱していた。初めは、目にした光景にただ呆然とし、その後には大きな余震が来るのではないかという恐怖が襲ってきた。

津波も原発事故が起きたことも自宅で知った。地震直後から連日テレビをつけていたため、津波の発生やその映像は早い段階で見て知った。直接体験していないが、津波警報や注意報が広範囲に出されていることに異常さを、実際の津波の様子が放送されたときにはその悲惨さに今まで感じたことの無いような恐怖を感じた。津波の映像でここまで恐ろしさを感じたのは初めてだった。大きな地震を体験した後だったせいもあるのだろう。日本がどうにかなってしまうのではとも考えた。原発事故も同様に早い段階で知ったと思うのだが、こちらはなぜだかすぐに実感がわかなかったように記憶している。恐ろしいことが起こったことはわかったのだが、自分の身に降りかかっているという実感が得られなかった。その恐ろしさも目に見えるわけではないし、原発事故によって何が起こるのかを明確に知らなかったこともあり、現実的に思えなかったのである。

2) 講義の中で最も印象に残っているのはグループ・シェアである。この時の講義が、私にとって初めて同じ大学生と 3.11 のことを真剣に語る場だったからだ。今までにも家族と話す機会や他の講義で課題の題材として挙がることはあったのだが、直接友人と震災や津波、原発について語る機会はなかった。そのために今まで知らなかった 3.11 への友人たちの考えや思いを聞き、先の震災に対しての認識が改められたり、今後についての心配事などを共有したりと、有意義な時間を過ごせたと考えている。

3) 講義を通して、国や一部の専門家、報道の話をも鵜呑みにすることがどれほど危険かを理解した。3.11 以前まではそのままの情報を信じがちであったが、震災を通じて不信感を抱くようになり、講義からは自ら情報を収集して比較し、どの情報が正しいかを判断できる力を身につけることの大切さを学んだ。彼らは国民をパニックに陥れないためという名目で、情報を隠したり偽ったりする。国が必ずしも国民のために動くのではないことを知って、全てとまではいかないが、いくら政府の人間が言うことであっても本当か否かはわからず、疑ってかかることが自分の大切な人々や自分自身を守ることにつながるという考え方になった。

1) 東日本大震災が起こったとき、わたしは栃木県の実家に居た。そこでテレビを見ていたが、揺れが起こった当初はすぐにおさまるだろうと楽観的に考えていた。しかし、揺れはすぐにはおさまらず、徐々に大きくなっていき、テレビは揺れの影響から電源が切れてしまい、棚のコップが床に落ち始めた。そこでわたしは急いでテーブルの下に避難した。そして、揺れがおさまった後、一緒に住んでいる祖父と共に家の外に出たが、家の前の公園に近所の人々が集まっていて、今まで経験したことのないような揺れに戸惑い、少々パニックになっているようであった。わたしの実家がある栃木県内の地域では、地震の後数日は停電し、水道も断水してしまった。

そのような東日本大震災に対し、自分もある程度大きな揺れを経験しているにも関わらず、どこか他人事のように感じてしまっていた。また、原発事故のニュースを新聞やテレビで見ても政府やメディアの情報を鵜呑みにしていた。

2) この授業では政府による情報隠ぺい、日本の震災の歴史、人の非常時の行動、産官学という社会構造など、さまざまなことを学んだ。その中で印象に残っているのは水俣病に関する講義である。水俣病が発症した時、人々は水俣病患者に対する差別という行動を取った。このことから、人間の未知の病への恐怖とそのような状況下で救済をすべき人々に対して差別を行うという人間自身の弱さを実感した。現在であれば差別に対する批判もできるが、果たして自分がそのような状況下にいたら未知の病への恐怖を耐えられたであろうか。差別は間違っていると言えたであろうか。非常時においてこそ精神的な強さが求められるのだと感じた。また、「差別のあるところに公害が起きる」という言葉から、社会構造の不平等さと犠牲を強いる社会システムの理不尽さを実感したが、同時にそれに対して何もできず、その恩恵を受けてきた自分にもどかしさや情けなさを感じた。

3) この授業を通して、東日本大震災は他人事ではないことを実感させられた。福島に原発を建設することで電気を発電し、わたしはその恩恵を無意識のうちに受けてきた。また、震災後の現在のような生活は、福島第一原発で危険な状況下にあるにも関わらず、事故の終息のために働いた人々、現在も働いている人々が実際にいるおかげで成り立っている。そのことに対するありがたみを、授業を通して強く感じるようになった。そして、震災から一年以上経った今も困難な生活を余儀なくされている人々もいる。そのような現状に対して自分は無力ながらも何ができるのかを改めて考えていかなければいけない。

1) 引っ越しのため東京から宇都宮へ移動している車中において東日本大震災を経験しました。大地震を直接的に経験していなかった私は、同震災の揺れの最中においても「ただ揺れの大きな地震」であると私自身の経験のうちから判断していました。そのときの私には地震に対しての恐怖感と私自身の命への危機感の両方が不在であったように思われます。しかしながら、その後のメディアによる報道を通して同地震が未曾有の震災被害を引き起こすことになる大地震であったことが明らかとなるにつれて、不在であった地震への恐怖感と私がいま生きていることへの安堵感が同時に生じてきたことを記憶しています。また、直接的に過去において経験した現象を超越した現象が起きた場合、その現象自体を適切に判断し、その結果を正確に予測できないことは人間の知性の限界なのではないのかと考えました。

2) 原発事故後の被災地を写真に納めた UU プラザ展覧会がとても印象に残りました。原発事故をどこか他人事のように認識していた私の無責任さと、報道の範囲内でのみ原発問題を理解していた私の無知さを強く咎められたような印象を受けたことを覚えています。

収められていた写真の一枚一枚が被災者の「今」を淡々と、そして生々しく伝えてきました。彼らにとって原発事故の被害は想定外の事態または例外的現象ではなく、受け入れそして立ち向かっていかねばならない唯一の現実として存在していたのです。このときはじめて、原発事故の現実を私も受け入れなければならないのだと気づかされました。展示を見る以前は、震災そして原発事故の直接的な被害の多くを回避できたため、私はそれらの事実を直面した現実として受け入れる必要性に駆られていませんでした。被災した当該地域を政府が例外的現象として処理しようとしたことと同様に、私も一連の震災被害を例外的現象として認識していたのです。被災者の現実を容赦なく突きつけてくる展示会の様子は私に私自身が生活している「今」が被災者の「今」と同じ時間軸において展開されている「今」であることを認識させ、以前よりも現実性を伴ったかたちで被災地への関わり方を考えさせるようになりました。

3) 原発事故に関しての政府の発表や被災地の実情に絡む報道への考察を通して、既存のメディアから情報を多層的に且つ多様的に読み取る必要があることに気が付いた。マスメディアが視聴者へ情報を伝達しようとする際、そこでは伝達側の主観的な意図に沿ったかたちで情報が編成されている。その主観的な意図の外にある情報はあたかも存在しないものとして全く扱われなくなる。主観的な意図の外にある事実もまた真実であり、報道された情報と報道されていない情報の偏差にこそ真理が存在していることもあります。この講義を通して、知ることの難しさと知っていることの不確かさを問いただすことができ同時に知ることの責任を自覚できたように感じます。

1) 私は、2011年3月11日の東日本大震災を、栃木県宇都宮市の実家にて体験しました。地震発生当時、少し遅めの昼食の後片付けの最中でした。弱い揺れ、おそらく初期微動なのでしょうが、これを感じたときは、「ああ、また震度3か4くらいだろうな」と言う程度にしか思いませんでした。あの時期は規模の小さい地震が頻発していたこともあり、高をくくるとでもいうのか、そのような心持ちだったのです。しかしながら、地震はまったく収まらず、かえって強く揺れはじめたのです。のちの報道で、宇都宮市は震度6強の揺れを観測したと知りました。このように大きな揺れを地震で感じたことはいまだかつてない経験だったので、動揺や恐怖のために慌てふためいてしまいました。本来は、落下物の危険があるため、外に飛び出すのは望ましくないはずなのですが、そのようなことは忘れて、貴重品を持って家の外に走り出しました。家がまるで豆腐のように揺れるのを見ながら、外出中の家族の安否が頭から離れず、不安で仕方ありませんでした。その後、家族全員が無事に帰宅し、ほっとしつつ散乱した家財道具の片付けに取り掛かり、夕暮れも近かったので作業を切り上げました。停電のため、蠟燭で灯りを取り、情報収集はラジオで行いました。余震が何度も発生し、途切れない恐怖の中で、祖父の古びたラジオから流れるノイズがかった音に安心させられたことを覚えています。

2) この授業の中で印象に残っているのは、第3回目の授業におけるグループ・シェアです。家族はもちろんのこと、日ごろ懇意にいただいている方々、友人とは大震災当時のことについて語らうことをしましたが、そうでない人々と大震災の経験を共有するという事は授業を介さない場合はなかなかないことだと感じたことがその理由です。自己の体験のみにとどめることなく、他の人々の体験に耳を傾け、また自分自身も語ることで、大震災に向き合い、再考するという意識がここで明確になったのではないかと思います。

3) この授業を通して、考えそのものが変化したと言うよりも、考えることに対してとる姿勢が変化したのではないかと感じます。授業の前までは、テレビをはじめとしたメディアから流される情報をほぼ聞き流すようにしていました。授業を履修し、その回を重ねるごとに、発信される情報を聴き、その背景にある状況などについて能動的に考えるようになったように思います。授業をきっかけに、大震災の経験者として、そして原発事故の影響を受けている者として、自分の立場は単なる傍観者にとどまるものではないのだと認識しました。

1) 実家（宇都宮市内）の近くの本屋でちょうど入店しようとした瞬間に大きな揺れがあった。駐車場の建物や看板から離れた場所でしばらく揺れが収まるのを待っていた。小さい子供を二人連れた母親が買ったばかりと思われる本を投げ捨てて、子供を強く抱きしめている姿がとても印象的で、ただならぬことが起こっていることを感じた。店内を見てみると本はほとんど棚から落ちていて、店の天井もいまにも崩れそうなほどに垂れ下がっていた。しばらくして揺れが落ち着いてきて多くの人が車で家に帰って行ったが、まだ看板などが揺れているのがわかったので私たちは車のなかで避難していた。ラジオからの情報の詳細は覚えてないが、車を動かさない方がいいと何度も言っていたのは覚えている。家に帰って見たテレビでまず驚いたのは、火災の映像だった。その後ほどなく津波の映像をみて啞然としてしまった。振り返ると 3.11 の日、私は東北の人の心配より自分の身の回りの人の安全確認に手いっぱいだった。朝になってテレビをつけると福島原子力発電所から放射能が漏れたというニュースで絶望的な気持ちになった。日光に住む友人の家族は車で、島根まで避難すると聞きさらに不安をかきたてられた。テレビをつけるたびに、被害者の数と福島第一原発の深刻さが増していくばかりで辛くなってしばらくテレビを見るのを避けていた。

2) 講義のなかで最も印象に残っている言葉は「今回の複合的な問題に対して、専門家と呼べる人間がはたしているのだろうか。」という田口先生の言葉だ。それは今まで原子力発電所やすでに漏れ出した放射性物質に対して、テレビでは「専門家」とされている人の言葉を信じ安心しようとしていたからだ。講義を受ける前は、テレビに出演するいわゆる「専門家」の発言をあやしいとは思いつつそれ以外に信じられるものがなく信用するほかなかったといった状況だった。

3) 一番大きく変わったのは、テレビというメディアに対する不信感である。これまではテレビでやっていることはすべて真実であると誤解しているような面があった。テレビが報道した政府の発表だって今になって考えると、事実が隠されていたこともわかるし、反原発デモのあれほどまでに大きな動きも、最初はほとんどとりあげられることはなかった。現在にいたってはテレビで報道される震災やオスプレイに関するニュースはほとんど信用しない。情報収集の手段もこの講義を通して変わった。新聞の比較という手段を有効的に使えるようになった。

2011年3月11日14時46分、三陸沖を震源とした地震が発生した。私は春休みの真ただ中ということで、その時間まで寝ていた。大きな揺れで目が覚めた。大きな地震は、不謹慎にも私を興奮させた。「これまでの人生で最大級の震度であることは間違いない」なんて考えていた。事の悲惨さを全く分かっていなかった。分かるはずがなかった。停電しており、回線も込み合っていて、ネットにアクセスすることができなかった。情報が一切入ってこなかったのである。しかし、それなりに大きい地震であるということは身をもって知っていたので、心配性の母親に「生きている」とだけメールを送信した。その日は、バイトがあったので普段通りに出勤すると、店内が散らかったので休業だった。バイト先にむかうときも帰るときも、特に混乱はなかった。警察官による道路規制にみんなが従っていて、「案外平和だな」と思ったことを覚えている。それから、家に帰ってようやく携帯でネットにアクセスすることができ、情報を得ることができた。「M8.6の大地震」「津波」「帰宅難民」などといった言葉に溢れていた。またTwitterのタイムライン上には、たくさんの安否確認のリツイートで埋め尽くされていた。日本人の態度を賞賛するTweetも多くみられた。家の外は、街灯がついておらず暗闇が広がっていて、サイレンの音が響いていた。正直、怖かった。余震に備えて、靴を履いて眠った。

翌日の正午には、電気が復旧した。それと同時に、どっと情報が流れ込んできた。その中に、原子力発電所が事故を起こした、という報道もあった。当時、原発事故、原発そのものの恐ろしさを全く分かっていなかった私は、その過剰な報道に嫌気がさしていた。「よく分かんないけど、専門家が大丈夫って言っているのだから、他の報道をすればいいのに」とさえ思っていた。しかし、政府や東京電力、専門家と呼ばれている人たちに対するその盲信は、Twitterを始めとするメディアが発信する情報によって、強い不信へと変わっていった。

私は沖縄で生まれ育った。戦後60年以上、日本に復帰して40年が経つにも関わらず、私の故郷には依然として米軍基地が残っている。そして、改善する兆しは、未だに見出すことができない。むしろ悪化しているのでは、と考えることさえある。私は、“沖縄だから”このような仕打ちを受けるのだ、と考えていた。政府は他の都道府県やその地域の住民には、優しいのだろう、と思っていた。講義で扱った水俣病も、とっくに解決したものだと思っていた。だから、3.11は“その他の都道府県”で起きたことだから、守ってくれると信じていた。しかし、そうではなかった。3.11の原発事故や津波、地震の被害にあった人たちに対する国のケアは、あまりにずさんすぎる。私の勘違いのほうはまだマシだった。講義で先生が繰り返し言った「国は国民を守らない」という言葉が、胸に刻まれている。同時に、「どうしてこうなった」と考える。国はなぜ国民を守らないのだ、なぜ見棄てるのだ、いつからそうなったのか。もしそれが、普遍的真理だとするのならば、国家の存在意義とは何なのだろうか。国家の必要性とはなんだろう。誰のために国家があるのだろうか。そもそも国家の存在を正当づける根拠とはいったいなんなのか。分からない。講義が受け終わった後に、講義を受ける前よりも「分からない」が増えるという、不思議な現象が、私の中で起きている。あまりに不快な「分からない」だ。分かるときが来るのかも分からない。それでも、問い続けることに、私は価値があると信じたい。「国家とは何なのか」と。

1) 3月11日、東日本大震災のはじまりである地震が訪れた14時ごろ、私は近所のスーパーにいた。同6日に大学進学を勝ち取り入学までの春休みを過ごしていた中で、その後の生活が大きく変わった瞬間であった。揺れ始めてすぐにこの地震がただならぬ規模のものであることはわかった。駐車場に停めてある車が大きく左右にゆれ、電柱が音を立ててゆがみ、店内は騒然としていることが店の外からでもわかる。足元がまるで船の上にいるような不安定さで不定期に揺らぎ、立っているのがやっと、という状態にまで陥った。しばらくして揺れが収まると、騒然としつつも自分の周囲の人々が落ち着きを取り戻し始めた。信号は停止したものの交通量も少なく、皆ちょっとしたアクシデント程度の感覚で冷静に対処しているようであった。そして自分もその認識の甘い人々のうちの一人であり、なかなかない経験をした程度に考えながら帰路についた私が見たのは、見慣れた整然と並んだ家々のいびつに歪んだ姿である。私の暮らしているところは池や沼を砂で埋め立てて区画整理し家々を建てた町であるが、今回の地震で埋め立てた砂に地下水が染み込み、地盤がゆるくなってしまう液状化現象が発生し家屋が沈みこんでしまったのだ。20年近く過ごしてきた町が、それも買い物にいく道でも見たまったく同じ風景がもの数十分で一変してしまったあのときの衝撃は今思い返すだけで言いえぬ恐怖に包まれる。

2) 私の父は東電社員である。とはいえ勤務先は埼玉であるし、仕事も電気を送るための配線計画を行うのが主な仕事という、今問題となっている原発とは、他人事のようであるがまったく関係ない。しかし父は震災発生の日から、丸一週間勤務先から帰ってこなかった。私の父だけではない。帰ってきた父の話では、父の勤務先ではあらゆる部署の社員が問題解決のために即座に動き出したのだ。東京電力は原発事故が起こったとき、決して愚鈍に戸惑っていたわけではないのだ。しかし世間の風説はまったく反対であった。活発に騒ぎ立てる週刊誌は心無い言葉であたかもすべての東電社員が無責任で悠長に構えているかのように煽り立て、テレビでは識者気取りのタレントがむちゃくちゃな論理でこれ見よがしに東電を批判していた。大学においてさえ学生同士の雑談の中に「すべての東電社員は問題解決するまで無給で休まず働けばいい」というふざけた言葉が聞こえたことすらあった。もちろんその学生が本気で言ったとは思っていないし、引き起こした事態から言えば真っ向から否定することも憚られるが、それでも軽率で、侮辱にもほどがある。しかし私はこの授業を通じて、私がこれまで彼らとおなじように、情報不足から軽率な極論を掲げていたことがあることを思い出した。人の振り見て我がふりなおせ、といった状態である。今後の大学生活で、「言葉にする前に良く考える」という基本的なことをより肝に銘じたい。

1) 宇都宮の職場の2階にいました。これまでにない揺れでした。夕刻宇都宮から20キロほど東にある自宅に帰宅すると、暗闇の中でも、自宅が大きな被害を受けていることが見て取れました。当時何を感じ、何を考えたか、あまりよく覚えていませんが、瓦が落ちた自宅の屋根をどうするか、が大きな関心事であったとは思いますが。

2) 第一に、最初の講義で配布された、幾つかの書物からの引用です。忘れようもない言葉になっています。「自分が見たくないものは見ようとしなさい」、「99.9%の確率でも、0.1%に当たった人には100%である」等々の言葉です。自分の急所を射抜かれ、同時に、想像力ということを考える契機となりました。また古典的著作の力を再認識しました。

鮮烈に記憶に残ったこととして、石橋克彦の原発震災についての論文があります。こんなことが今回の地震、原発事故の数年前に書かれていたのかと、大きな驚きでした。しかも私でさえ名前は知っているような雑誌に掲載されていました。地震直後の「想定外」という東電の釈明が記憶に残っていますが、石橋論文を読めば「見たくないものは見ようとしなさい」という言葉の意味を思い知ります。また、広瀬弘忠のパニックについての分析も深く心に残りました。

たくさんの参考文献を紹介していただきました。その中の「犠牲のシステム」(高橋哲哉著)は忘れられない読書となりました。「犠牲のシステムでは、或る者(たち)の利益が、他のもの(たち)の生活(生命、健康、日常、財産、尊厳、希望等々)を犠牲にして生み出され、維持される。(中略)この犠牲は通常、隠されているか、共同体にとっての『尊い犠牲』として美化され、正当化されている」という言葉で、幾つかの現象がすっきりと整理されました。今後社会現象を見ていくときの大事な視点を与えられました。

3) 新聞を注意深く読もうという気持ちになりました。特に、これまでは自分と考え方があわなような人の意見は丁寧に読まない傾向がありましたが、今は様々なサイドの意見を丁寧に読む必要性を感じています。7月8日の読売新聞にJR東海会長葛西敬之氏が大飯原発再稼働に賛成する立場で寄稿しています。氏は太陽光発電に対し「1000万戸の屋根にソーラーパネルを設置するとなれば、設置・維持管理や経年劣化後の廃棄処理のため多額のコストが付加される。最終的にはそのコストは全て国民の税金か電力料金に上乗せされる。」と批判的ですが、当然比較されるべき核廃棄物や経年劣化した原発の廃棄処理費用については何の言及もありません。このような乱暴な議論を誰がいつしたかということをしちんと記録に留める必要があると考えるようになりました。

この授業に出席できたことは、本当に幸運な偶然と思っています。恐らく日本社会の変わり目となる時期にその変化の核心にある問題をめぐって広く深い視野での教えを受け、かつ自分なりに考え始める契機ともなりました。

震災が起きた時、私は家族と栃木県羽生市にあるデパートの最上階にいた。初めは微かにしか感じられなかった揺れはしだいに大きくなり、その場にいた人々は立ってられずにうずくまった。経験したことのない揺れを感じながら、これは本当に現実なんだろうかと思っていた。母が怯えている様子だったので「大丈夫だよ」と言いながらも、緊迫した死への恐怖が波のように襲ってくるのを感じていた。

揺れが収まった後、私は家族がいたこともあり落ち着いていた。しかし、私たちよりも大きな被害を受けた人々がいることを帰宅後に報道で知り愕然とし、被災した地域の状況を伝える報道を母と二人でじっと見つめていた。原発が爆発する映像と、それについて問題はないとするナレーション、それを非難する家族の声が隣の部屋から聞こえ、何か大変なことが起きていると漠然と感じた。それ以来、自分がその時感じたことや、次々と流れてくる情報に対する感情がうまく処理できぬまま、震災と原発事故に関する私の思考は止まってしまった。この講義を受講し始めてから、それがまた動きだしたように感じている。

講義の中で最も印象的であったテーマは、原発事故への政府の対応からわかる日本の民主主義の実態である。福島県における原発事故を受けてなお、国民との対話を経ずに大飯原発再稼働が決定された時には戦慄を覚えた。国民の意見が反映されていないという以前に、意思が問われることのないままに原発事故後の社会の方針が決められつつある現状を考えると、確かに民主主義の崩壊と形容せざるを得ないかもしれない。そうした方針は国民の安全な生活よりも政治的・経済的判断に基づいて決定され、その後問題が起きた時最初に被害を受けるのは社会的弱者であるという社会構造そのものにも危機感を覚える。

先に述べたように、私は震災と原発事故に関して「大変なことが起きた」という漠然とした不安しか持っていなかった。しかしこの講義を受けながら知識を身につけ、他の人々の意見や先人の主張を聞いているうちに、今回の震災と原発事故にはあらゆる社会問題が集約されていると考えるようになった。棄民の論理や科学技術への過剰な依存、民主主義の崩壊といった問題は全て今回の出来事、特に原発事故と密接に結びついている。この講義を受けたことで、震災と原発事故への漠然とした不安は、現代の日本社会全体に対する明確な問題意識へと変わったように思う。

1) 大震災が起きたあの時、私は友達と地元である群馬の高崎駅で昼食をとっていた。私も友達は二人とも進路が決まっていて、私は宇都宮大学の合格発表から数日しかたっていなかったため浮かれていた。そしてその日はかなり久しぶりに友達と遊ぶ日であった。買い物を済ませ、遅めの昼食をとっていた時に、ガタッと急に強い揺れを感じた。私は最初、「ここは駅で電車が通っているから、揺れているのだ」と思っていた。揺れは次第に強くなってゆき、周りにいた女子高生や家族連れがあわて始めた。女子高生の中には泣き出す人もいた。いよいよ私や友達も事の深刻さに気付き、走って外に出た。確か私が走り出した時が揺れのピークであったと思う。駅の外には既に何人もの人が駅から出てきたようで、人であふれかえっていた。私は不思議と冷静でいられて、パニック状態ではなかったと思う。ビルが揺れているのを見ながら、はっと気が付いたように親族に連絡を取ったのをよく覚えている。しかしつながらなかったものの方が多かった。ようやく長かった受験生活から解放された私にとっては、かなりショックであったと同時に、どこか楽観的で周囲に大した被害がなかったので、「きっと大丈夫だ。少し経てば今迄通りに暮らせるはずだ」とその時は思っていた。

原発の事故が起こったのがわかったときは、正直あまり危機感を抱いていなかったと思う。放射能の危険性について全然わかっていなくて、ただただニュースの情報を見ているだけであった。何も考えなくなかったのかもしれないし、何も信じたくなかったのかもしれない。震災被害や放射能問題について受動的だったと思う。今、それをすごく後悔している。もっと問題について向き合っておくべきであったと思う。

2) 私が一番印象に残っているのは、石橋克彦の「原発震災」とそれに関する講義である。3.11 以前まで私は「原発は確かに危険だし、放射能は危ない。しかし石油などに依存し続けるのは環境に悪いし、いずれ枯れてしまうものなのだから、原発は電力のために必要だ。」と思っていた。しかし、講義では全く正反対の事実、すなわち原発はクリーンエネルギーではないし、経済的でもない、持続可能でもないという事実であった。いかに私はこれまで騙されてきたか、また情報を鵜呑みにしてきたかを痛感した。そして石橋氏のその報告は 1997 年のものであり、彼が警告したのにもかかわらず、その時より原発の数が増えてしまったこと。さらに彼の警告が現実のものとなってしまったことに、政府に対し怒りと恐怖、無力感を覚えた。なぜ政府はこの人の警告に耳を傾けなかったのか、なぜデメリットの多い原発を建て続けたのか疑問でならない。

3) 授業を通して、嘘で塗り固められた原発事業の事実、災害や公害と差別のつながり、腐敗しきった行政の歴史、あらゆることを学んだ。その中で痛感したのは、いかにこれまで 3.11 という事故を他人事としてとらえてきたか、情報に対して受動的だったかである。メディアから流れる情報を疑わず、鵜呑みにしてきた自分が情けなくなる。授業を通して知った文献を読んだり、意識的に新聞を読んだりするようになった。自分の知らない分野興味のない分野でもしっかりと読まないともた騙されると思うからだ。また、3.11 以前は「原発は必要」、以後は「とりあえず危ないから原発反対」、授業を受けてからは「原発は絶対に反対」という風に自分の意見が変わっていった。「絶対反対」という意見を持ったのは原発や放射能についての正しい知識を得たからである。自分で情報を集め、自分の意見を持つことができるようになったと思う。

1) 2011年3月11日、私は以前通っていた東京の学校にいるときに震災を経験しました。強い揺れを感じたので、初めは首都圏を中心に起きた地震だと思いましたが、少ししてインターネットがつながると、どうやら東北地方が震源地だということがわかりました。すぐに帰宅しようと思いましたが、学校から自宅までは電車で1時間半の距離があり電車も運休状態でしたので、結局その夜は学校で過ごすことになりました。夕食を買いに外に出ると、いつもは人通りの少ない道を大量の人々がいて、歩いて帰宅しようとしている人々だということがわかりました。道路も渋滞しており、街中が混沌としていました。コンビニも人で溢れ、商品もほぼ完売状態でした。

数年前から首都直下型地震の恐れがあるとされていましたが、特に危機感を感じていませんでした。しかし、3.11時の混乱ぶりを目の当たりにしてから東京の街を見てみると、危険な個所があまりに多く、不安を感じました。ここで、被災した場合自分に何ができるかを考えておそらくは何もできずにいるのではないかという無力感さえ覚えました。

2) エリート・パニックという言葉は初めて聞きましたが、「エリートや権威者たちは災害による変化を恐れる」もしくは「彼らの権力基盤を揺るがすもの」と思い込んでいるということで話があり、非常時に真っ先に頼りたい国家の中心的役割を果たす人々の頼りなさを感じました。

3) これまでは、なにか問題が発生した際にメディアに出てくる数人のコメンテーターの話を聞いたり、記事を読んだりして、それを鵜呑みにしてしまっていました。しかし、彼らの意見はそれぞれの立場によって全く違うことが述べられているため、より多くの資料から情報を集めることの大切さ、それは書籍などに限らずネット上の映像や映画などもうまく利用すれば貴重な情報源になるということを強く感じるようになりました。

1) 当時、私は秋田県鹿角市の実家の二階にいました。地震が発生しているその時は、妹と「また地震か〜」と、地震が終わってから、「今回は結構強くね？」話したことを覚えています。安全防止のために消えたのかと思っていたストーブをつけようとしてもつかないので、停電だということを知りました。秋田はまだ、山の上であるのでなおさら、凍えるような寒さの季節でした。携帯で震度を確認しようとしてもインターネットがつながりません。少し離れた本家に住んでいる母に連絡しようにも回線が込み合っているとのこと。何もできないし寒いので急いで本家に妹と向かいました。テレビはもちろんつかないので情報はわかりませんでした。我が家は停電と金魚の水槽の水が少しこぼれる程度の軽い被害だったので、「早く電気がつけばいいな。てかケータイ使えないし。」くらいにしか考えていませんでした。この日は、リビングで家族5人、ろうそくをつけて毛布を掛けながら寒さをしのぎました。やっと電気が復旧したのは大体24時間後で、テレビがつくとあらゆるチャンネルが地震の情報を報道していました。事の重大さが次第に分かってきました。初めは「大きな地震で大変なんだ。」と見ていました。3、4日後のことだったでしょうか。画面の脇に「東北大地震」、「東日本大地震」と書かれるようになったことや、一番に津波の生々しい映像がテレビで繰り返し放送されること、死者・行方不明者の数が増えていくことを目にするうちに、「大変なことが日本に起きている。」と思うようになりました。そして、世界で起こった地震の中での最高の規模だ、と学者たちがいい、福島原発の状況がテレビに登場するようになってから、「日本は終わった。」と感じるようになりました。死者を見て、気の毒に思うと同時に、私は宇都宮大学に合格していなかったら、当日仙台で某大学の後期試験を受けることになっていたのも、命拾いをした気がしていました。死ななくてよかった。と思いました。あと、「さらに不景気になるなあ、日本の借金がさらに増えていくなあ」ということも考えていたと思います。原発に関しては、なんで地震大国に、地震で壊れるような弱い原発を作ったのだ、と怒りを感じていました。

2) 「原発は二度目の敗戦だ」という評論家の言葉が印象に残っています。あと、第2回コメントの、「本当はすでに誰もが当事者ではないのか」というE.T.さんのコメントです。E.T.さんは、3.11に対して当事者意識を持つことが国民の義務なのではないかと書いていましたが、私は「3.11に当事者意識を持つこと」というより、「以前から当事者意識を持つべきではあったが、それが今回改めて見直された」と納得しており、大半の授業内容の中で少し相違点を感じていたのも、印象に残っているのだと思います。加害者である国家の被害者は国民であったこと。もっと早く気付くべきだったと感じます。54基の時限爆弾を抱える前に、です。そして『原発切抜帖』。昔から懸念されてきたことが今の国にちっとも役立っていない、ということを感じ知らされました。

3) 国家を憎むべき対象としてみていたが、恐れるべき対象としてみるようになったことが一番の考え方の変化だと思います。これほどの事故が起こっても、どれだけの人々が首相官邸前で声を上げて、国の方針と、国家が一番強いのだと示すことをやめないこと。民主主義、「国民の声を聴きます」と言っておきながら、選挙が終わると国民の声を徹底的に排除すること。沖縄の基地問題、オスプレイに関しても、ただただ国の言動を恐れるのみです。日本は崩壊に向かっているというより「崩壊半ばまで来ている」と、授業を通してさらに濃く、強く思うようになりました。変わらなかったことは、やはり国民は何をしたら国家の「核」まで声を届けることができるのか、ということがわからなかったことです。

1) 3月11日、私は実家である秋田県横手市にいた。その日は、母親が仕事から帰ってきた後に一緒に少し離れたショッピングモールに買い物にいと約束手をしていた。家には祖母と私だけだった。母親から「今帰る」と電話がきたため、あわてて歯を磨き始めた。母親との買い物は久しぶりだったため、胸を弾ませていた。「ああ、楽しみだなあ。何を買おうかなあ〜。」と考えていたまさにその時、大地震が起こった。最初の揺れを感じた時、すぐにおさまるだろうと思っていた。しかし、その考えとは裏腹に地震はいつこうにおさまらず、むしろ徐々に強くなっていき、何かに掴まっていないといけない状態だった。私は揺れる食器棚を無我夢中でおさえていた。怖くて手が震えた。揺れが少しおさまり、真っ先に頭をよぎったのが家族の事だった。私の家族は、仕事や大学の関係で父、母、兄、自分が皆別々の県に住んでいるので、本当に家族の安否が心配で、ただひたすら家族の無事を祈っていた。

2) グループディスカッションが最も印象に残っている。私たちのグループには、被災地出身の人が三人いて、3.11当時の被災地の状況と被災者の心境や本音を知ることが出来た。そのディスカッションの中で、去年の夏に行われた被災地ボランティアでは外国人のボランティアの方は大勢いたが、日本人のボランティアの人が全くなかったという話を聴き、とてもショックを受けた。そこで日本人の震災に対する無関心さに気づき、忘れられ行く 3.11 の被災地のことを考えるようになり、その後の授業により真剣に取り組むようになった。

3) この授業を受けて変わったことは、メディアが報じる事や専門家などの権威者がいう事を全て鵜呑みにしてはいけないということだ。自分たちに不利なことを私たち一般市民に伝えない政府のいうことを全て信じてしまっはいけないと思った。与えられた情報を自ら取捨選択する力が必要となっていくと思う。授業を受けて変わらなかったことは、3.11 や原発事故を風化させてはいけないという思いだ。3.11 に起こったことを風化させてはいけないと考えこの授業を受講したが、授業をうけるにつれ、さらに風化させず、私たち若い世代が後世にも事実を伝えていかなければいけないと感じた。被災した当事者でない限り、その時感じた痛みや悲しみは時間とともに薄れていってしまう。しかし、痛みが薄れていっても3月11日に起こったことは歴史的にも無くなることはないし、当事者の心には深く刻まれているはずだ。私たちが出来る数少ないことは、この現実を忘れず、考え続けていくということではないだろうか。

私は東日本大震災が発生したとき、秋田県にある実家において、居間でテレビを見ていた。携帯の地震速報とテレビから流れる地震速報にひどく驚いたのを覚えている。地震が起きてすぐの頃は、ただただ自分の家族の安否が心配であり、宮城県などの被害が大きかった県のことは「大変だな」程度にしか考えていなかった。震災後の何日間かは停電が続き、テレビを見ることが出来なかったため、代わりにラジオとツイッター、携帯からの情報に頼るしかなかった。精神的に落ち着いてきたころ、電気が回復しテレビが見られるようになったが、報道されている映像に強くショックを受けた。そして、原発事故が起こったことにより、4月から地元を離れて原発事故の起こった福島に近い栃木県で一人暮らしをするという今後の私自身の生活に、強い不安の感情を持った。私は、今でもだが、自分自身の生活や家族の今後の生活に対する不安ばかりが先行してしまい、被災地で暮らす人々への行動を起こすことはできなかった。

この授業の中で、「電力を使わない生活をすれば、事故などが起きた時に、必ず被害を免れることが出来るのか」というコメントが非常に印象に残っている。原発に反対している人に対して「だったら電気を使うな」という言葉を投げかけている人を、インターネット上でも、生活の中でも、見ることがあった。しかし、仮に福島第一原発の周辺に住んでいる人で電気を使わない生活をしてきた人がいたとしても、今回の原発事故による被害は被っていただろう。したがって原発反対だったら電気を使うなという意見は、全くの無意味なのである。

この授業を通して、十分な情報を得るには、テレビやインターネットからだけで十分であるという考えを改めさせられた。これまでは新聞を読むということを日常的に行ってこなかったが、新聞を日常的にみることで、政府の発言の変化などの細かい情報も得ることが出来る。また、様々な新聞社があるが、それぞれ報道している事象は同じでも内容が異なっている場合があるということを知り、自分が最も欲している情報について書かれている新聞を見つけ出す必要性を感じた。

この授業を受講して、現在の日本が、私たちが想像しているよりも、政治や国民生活がはるかに危険な状態にあるということに気づくことが出来た。原発のあり方や、風化していつかのように感じられる東日本大震災への関心を再度考えるきっかけができ、よかったと思う。今後も様々な動向に目を光らせていきたい。

東日本大震災が起こった当時、まだ高校生だった私は、山形県にある実家で過ごしていた。家族が皆外出しており、一人でいるときに揺れ始め、揺れが収まったころには各チャンネルで震災関連の報道が始まっていたのを覚えている。揺れが収まったのを確認すると、家族に連絡をとろうとしたが、30分程連絡が取れなかった。後に無事だと確認することができたものの、非常に強い不安を感じた。幸いにも私の住む地域では電気水道ともに無事だったが、数日後には近くの店にはほとんど商品が見つからない状態だった。震災の被害を深刻に受けたわけではないものの、実際にこのような状況に陥り、こういった場合に備えて何も準備をしてこなかったことに気付かされた。関東大震災はいずれあり得ると報道され、その危険性も度々報道されてきたのにもかかわらず何もしなかったのは、無関心ゆえの結果であると思う。この経験を通して、無関心でいること、危機意識が低い状態でいることがいかに恐ろしいかを学んだ。

現代思想の授業の中で特に印象に残っているのは、グループで意見を述べ合う形式の授業だった。グループ内では震災当時さまざまな状況だった人々と話すことができたため、東日本大震災が持つ様々な側面について考えることができた。私自身は東北出身であったが、私よりさらに大きな被害を受けた人や、逆にほとんど直接の影響が無い人もいたが、立場によって震災をどのように感じたのかが全く異なり、加えて個々の価値観も影響してくるので、それを聞くことで東日本大震災というあまりにも膨大な情報をもつ出来事を少しでも多角的な視点からとらえることができるようになったと思う。また、グループワーク中は、議論するのではなく他者の意見を聞くようにという指示であったが、このことも重要だったと思う。グループワークが盛り上がっていく中でつい議論になってしまうことはあったものの、他者の意見を受け止めるように心がけることで、客観的であるように努められた。

現代思想の授業を受けて、特に考え方が変わったのは、放射能に関する問題意識に関してであった。正直なところ、私自身は放射能に関してそこまで重大に考えていなかった。というより、放射能が飛んでいたところで引越すというわけにもいかないし、考えたところで仕方がないという程度にしかとらえていなかった。また、東電の問題に関しても、擁護派であったわけではないが、これだけの大きな災害があったのだから仕方がないとも考えていた。しかし、授業の序盤で先生が「家族を放射能の危険から避難させた」という内容を授業中に話したことが、放射能汚染に関して大きく考えなおすきっかけになったと思う。その後も放射能汚染がどの程度広がっているのか、どのような影響が考えられるのかを学ぶうちに、いかに自分が楽観的であったかを思い知った。原子力発電所に関しては、賛成派ではなかったものの、恩恵を受けてきた以上真っ向から反対することもできないと考えていたが、前期の授業を終え、エネルギーを選択する権利や、原子力発電の危険性を考えると、今は撤廃するべきだと考えている。しかし、その反面、この授業を受けた印象としては、ある程度の範囲で正解が用意され、その正解に誘導されているようでもあった。先生のおっしゃる内容が理論的で説得力があり、断言されるからということもあるが、こうしてこれまでの授業を振り返ってみると、自分で原発推進派の理論について考えることが少なかったように思う。今後の自分の課題としては、原発擁護派についても詳しく調べ、より客観的な視点で原発問題について考えていきたいと思う。

1) 私は山形県山形市出身なのですが、震災数日前に前期日程の合格通知が届き、震災当日にはここ宇都宮に部屋を探しに宇都宮に来ていました。震災が起こったそのときには、ちょうど新しい物件を見ていたところでした。今までに体験したことのない揺れに建物ががたがたと揺れ、最初は強風だと思っていましたが、携帯電話を開いてこの地震の脅威を初めて知ったのです。その日はもともとホテルに泊まって翌日も部屋を探す予定でしたが、水も電気も何も使えず、寝床だけを貸してもらって夜を過ごしました。一緒に宇都宮に来た母と、充電が残っていた携帯電話だけが私の頼りで、今までで一番不安な夜を過ごしたことを覚えています。次の日、いつもの五倍以上の時間をかけて車で山形まで戻ってきたとき、水も電気も使える、お店もホテルも通常通りに営業している環境に驚くことしかできませんでした。

また宮城県仙台市に住んでいるいとこ家族が、最低限必要なものだけを持ってこちらに避難してきました。内陸だったので津波の被害はありませんでしたが、上からモノが落ちてきたことや食糧や水分不足であったこと、同じ東北、隣県であるのにここまで被害や生活の様子が異なっていることに驚いた、と彼らが話していたことがとても印象に残っています。震災直後は正直自分や家族、親戚、友人のことを考えるので精いっぱいであったことを覚えています。

数日後、原発事故が発生しました。実家のテレビで初めてその情報を知りましたが、原子力について何の知識もなかった私は「爆発によって何が起こるのだろうか」という疑問や、聞いたことのない専門用語ばかりでほとんど理解することができませんでした。とにかく何か危険な状態なのだ和本能的に悟っていました。

2) 今回の授業を受けて一番印象に残っているのは、最初の講義になりますが、「当たり前」に驚き、そして疑うということです。例えば以前のコメントシートにも書きましたが「日本は地震大国だから地震が起きて当たり前だ」と考えながら今まで過ごしてきたことが、課題であった動画を見て三月十一日以降に発生した地震の数が、それ以前とは比べ物にならないくらい増えた、という事実を知りました。本当に今まで通りでいいのだろうか、何か改善できないだろうか、と今まで当然だと思っていたことを考え改めなければならない、と実感しました。

3) この授業を受ける前までは、このような一学生の私になど何もできないのではないかと、思っていました。しかし前期中に宮城県石巻市を訪れる機会があり、現状を見て何もできないと考えている場合ではないと思いました。確かにまだ学生の私にはできることには限界があります。今回この講義を受けて、とにかく自分には知識が足りない、と感じました。まずは震災や原発に関する基礎的な知識を増やしていくことが必要なのだと思います。さらにもし機会があれば、実際に震災を経験した人の話を聞いて、その苦しみや痛みを分かち合いたいです。そして何より大切なのは、この東日本大震災のことを後世へと伝え、忘れないことであると考えます。

1) 大学受験を無事に乗り越え高校の卒業式も終わった頃、母親と一緒に山形県にある地元のショッピングモールへ買い物に出かけていた。東日本大震災が起きたのはそのときだった。建物自体が大きく横に揺れるような大きな揺れに、一瞬震源地はここなのかと思ったが、帰宅して テレビをつけると宮城県沖が震源地だということ、そして大きな津波が三陸海岸を襲っていることを知った。そして福島第一原発が危険だという緊急ニュースが流れた。津波も原発も直接 その場にいたのではないし、私はただ茫然とテレビに映った現実を眺め、しかも原発に関しては楽観視していた。そんなに騒ぎを起こすようなことでもないのだろうと。しかしその考えが いか「科学への絶対的な信頼」によって出来た無根拠なものかはそののちのち知ることとなった。

2) 授業を通して印象に残っているのは「産業技術社会の科学に対する絶対視」への不信だ。私は今まで自分のいる社会が、産官学を三位一体とするような構造であることを知らなかった。そして 3.11 のあとの東電や行政の対応について確かに不信感があったものの、そのはっきりとした正体はわからなかった。しかし授業の中で「水俣病」について学んだとき、不信感のはっきりした正体がわかった。国家と資本の結びつき、そして大学とのかかわり。学問の実が国民の利益ではなく国家の利益となるシステムに自分がいることに気が付いた。単に自分が知らなかっただけで、私は核心的に社会とつながっている。その社会によって生まれる歪みに自分が飲み込まれるかもしれないということが強く記憶に残っている。

3) この授業を受ける前の私は社会に対して受動的で楽観的だった。3.11 の原発事故に対しても鈍感で、テレビの向こう側で起こっていることのように感じていた。しかし今学期この授業を通して私たちの住む社会のシステムの問題とそれによって生み出された歪みについて知ったことで、自分は社会の中にいるひとつの要素なのだという考えに至った。そして他の学生たちの意見をシェアしたことで、決して一人よがりではなく、他者との結びつきを強く意識した。それは決して 3.11 のことだけではなく、沖縄の基地問題、水俣病にも当てはまる。この授業を受けるまでに楽観的でいられたのは、私が直接その被害にあっていないことから、自分との関係を断ち切っていたことによると思う。現実には起こっていること、そして他者から自分を切り離さず真摯に向き合っていきたい。もう一度被災地に赴き、ボランティアに行ってみたいと思う。直後では感じる事ができなかったものを掴めるのではないかという思いがする。

1) 3.11 のとき、私は山形の実家にいた。家の中で一人テレビを見ていた。地震が起きたとき、揺れの大きさと時間の長さにとっても驚いたのを覚えている。周りの家具が倒れてくるのではないかと思い、急いでこたつの中へもぐりこんだ。しばらくして、テレビやの電源が切れて停電になったことに気づき、心配になって携帯電話で親に電話をしたが、回線が混み合っていてつながらなかった。しかしメールはできたので、家族が無事であることがすぐわかり、安心できた。揺れが大きかったので、最初は山形の直下型地震だと思っていたが、徐々に情報が入ってくるにつれて、宮城や岩手のほうではもっとひどい被害があったということを知り、事の重大さがわかってきた。テレビで津波を見たときは、衝撃的すぎて、日本で起きていることだとは信じられなかった。漠然と、これから日本はどうなってしまうのだろうと考えていた。

2) 福島第一原発事故による放射能セシウム 137 の放出量が、広島原爆の約 160 発分に相当する量であるということを授業で聞いたときはとても衝撃的だった。それまで、福島第一原発事故は広島原爆に及ぶほど放射能汚染されているとは思っていなく、かなり楽観的に考えてしまっていた私にとって、原発事故を非常に重い事故であったと認識させるものとなったため、とても印象に残っている。また、資料の中では、石橋克彦氏の「原発震災」が印象的であった。まさに福島第一原発事故を言い当てたような内容に目を見張った。なぜこんなにも正確で的確な論文があったにもかかわらず、悲惨な事故が起きてしまったのだろうか、非常に残念な気持ちになった。

3) 授業を受ける前は、福島第一原発事故についてあまり自分から知ろうとしなかったし、正直そこまで深刻に考えていなかった自分がいたが、授業を通して、原発事故の大きな被害や、自分が想像していたよりもはるかに深刻な状況について知り、徐々に、脱原発について、福島の復興について考えるようになった。政府の原発に対する発言にも注目するようになった。原発はどこか自分とは縁のないものだと思っていたが、甚大な放射能汚染や、写真展で原発作業員の実態を知り、原発問題は自分にも直接関わっている重大な問題なのだということを強く感じた。今では、原発問題は国民一人一人が責任を持って関与していき、意思を示すことで解決へとつながるのだと考えるようになった。

1) 私の出身は長野県であるため、3月11日は長野県の実家にいた。まだ、大学生ではなかったため栃木とも関係はなく、震災後の情報も長野県で受信し、勿論目に映る景色は何一つ変わらないものであった。震災時、家で午後のダンスのレッスンを備え準備や練習を妹としていた。震災直後、小さなしかし長い揺れを感じた。私の実家がある上田市は、普段ほとんど地震の揺れを感じることがないため小さな揺れでも恐れを感じた。その時は、たまに起きる揺れであるといった程度しか考えてはいなかった。

2) 私が授業を通して最も印象に残っていることは、誰がパニックを起こし、誰がなぜパニックを恐れるのかと言うことだ。授業を受講する前まで、パニックを起こすのは国民で、パニックを恐れるのは政府であるといった固定観念があった。しかし、授業を受けていく中で、この固定観念は覆された。パニックを起こすのは政府であり、パニックを恐れるのも政府であるということを知ったのである。そして、そこにパニックという言葉の乱用が事態を曖昧にし、問題を隠してしまうという事実を知り、この言葉の重さに気付かされたのである。私が思っていた以上に国民は強く、危機に直面した際に、政府よりも冷静で正確な判断を下せることが明らかとなり、世の中には権威者のパニックを示す、エリート・パニックという言葉が存在していることも初めて知ったのである。そして、このエリート・パニックの事例を講義の中で二つ扱ったが、これも興味深く、政府のパニックが更なる危険を呼ぶことを知ったのである。

3) 普段の生活の中で、あらゆることに関して疑いの目を持つことが大切だと思ってきた。私の中では、全ての事が疑うべき対象となっていた。しかし、授業を通し、疑う前に考えることの重要性に気付かされた。その人がどの立場から物事を述べているのか、どこに注目してその事を見ているのか、それらをよく自分の中で考え、整理した上で疑うことによって、正確な情報を逃すことなく自身で取捨選択できるのだと考えるようになった。私の中で権威者は、確かに一種の敵である。彼らの言っていることすべてが嘘であり、言葉に根拠がなく聞いているだけで苛立ってくるため、あえてテレビを見ないでいた。すべてをシャットアウトしていたのである。その時、私は自分の中の憶測と、権威者に対する気持ちだけで物事を語っていた。しかし、それこそ根拠付いていないし、それを語る資格はないと考えるようになった。全てを知り、そこで多くを考えた上で物事を語ることに意味があるのではないかと考えるようになったのである。目を背けたくなる事実としっかり向き合うことの重要性に気付いたのである。

1) 私は震災の時、関西にある地元で洗濯物を畳みながら母とテレビを見ていた。最初、地震のことを報道したニュースでは、東京の街の通りが映され、ビルの窓ガラスが割れて下に落ちている状況を見た。最初のあたりはそればかりで、大きな被害が出なくてよかったな—とっていたが、しばらくすると大きな津波に呑み込まれていく街の映像が映された。数年前に見たスマトラ島の津波を見ている感覚で、日本で起こっているという実感が湧かなかった。「日本じゃないみたい・・・。」と傍観していた。日本でこんなことって起きるの？本当に日本なの？とただ認識ができないでいた。一応地元の海岸にも小さな津波が到達し、2日間程津波注意報が出されていただけだった（といっても、こんなに日をまたぐほど注意報が出されていたことはいままでなかったのだが）。最初の頃は、全く津波によって被害を受けた土地の情報は報道されず、原発のことがずっと報道されていた。私は心の中で日本から脱出しなければならないのではないかと心配していたし、先に東京の大学へ進学していた友達がいたのだが、その母親のところへ行き、彼は大丈夫なのか、彼は帰って来られないのかと一緒に連絡を取った。その子の母親は原発に激しく怒りを覚えていた。私もこれから栃木へ進学することになっていたし、栃木がどんなに悲惨な状態になっているのだろうと心配だった。特に私の気持ちを滅入らせてくれたのは、これから栃木で会う友達のことだった。宇都宮大学は東北の人が大部分を占めていることは知っていたし、これから会うはずであろう友達が、会うことなく死んでしまっていることを想像した。また、家族や友達が亡くなってしまった友達に、どう接していけばよいのだろう、私には何ができるのだろうと思った。これから住むはずの町の様子は、放射能はどうなっているのだろう。分からないことばかりで、私、家族、知り合いの人たちは分からないということにより、不安を抱いていた。

2) 私がこの授業で印象に残ったことは、様々な問題に対して、自分は今までなんて少ない情報しか持っていない、そして情報が少ないということさえ気づいていなかったということです。

3) 私は授業を通して国家やメディアに強い不信感を持つようになった。私たち国民は情報の背景や意味をよく咀嚼し、注意深く国の動きを観察しなければならないと感じます。今まで国際学部の勉強はためになるとは思ってはいたが、実際将来どんな場面で役立つのかは具体的には言うことができなかった。しかし、この授業を受けて、私たち国際学部の生徒は真実を見るための能力を身に付けなければならないと思う。なぜなら、もし私たちが大きな変化の時代に遭遇したとき、私たちはあらゆる問題に翻弄されることなく、人々を守っていく人間とならなければならない。これが国際学部生の使命なのではないかと感じるようになった。強い力をつけていきたいと思います。

1) 私は、3月10日午後羽田空港を飛行機で出発し、地元である鳥取県に帰省しました。3月11日は朝から家族で車に乗り、神戸のショッピングモールに買い物に行きました。地震発生に気づいたのは、母の携帯に、埼玉県に住む叔母から連絡が入ってからです。「数分前に大きな地震が発生した。家族みんな一緒にいる。私たちは大丈夫だから、安心して欲しい。」という内容のものでした。また、叔母は私が帰省していることを知らなかったため、私の安否も心配して一番に母に連絡をくれたようでした。それから、状況を知るために、広いショッピングモールの中でテレビを探しました。ショッピングモールの中央に設置してある巨大なテレビを見つけた時には、人だかりができて始めていました。テレビにはすでに凄惨な津波の映像が流れていて、あまりにも現実離れしたその光景を見ても、映画のワンシーンのように思えました。それから、心配でいてもたってもいられず、友達に電話をかけました。電話はつながらず、不安になりました。そんな私を見て母は、「回線が混雑しているんだろうね。もっと電話の回線を必要としている人が沢山いるのだから、今は電話は我慢しよう。」と言いました。情報を求めて、mixiなどのSNSも見ました。それからは買い物する気にもなれず、すぐに帰りました。とにかく、情報が欲しいという気持ちでいっぱい、帰宅してからはずっとテレビをつけていました。印象に残っているのは、翌日、暖房をつけたコンビニのドアが大きく開けばなしにしてあるのを見て、被災地は電気が足りずに困っているのに、同じ日本なのに、どうしてこうも違うのだろうと、なんとも言えない気持ちになったことです。家族や親せきは、私が帰省していて本当によかったと、喜んでくれました。でも、私には栃木に友達や知り合いが沢山います。私だけ何不自由ない生活を送ることになんとも罪悪感があり、とても複雑な気持ちでした。地元の友達が、震災のことを本当に他人事のように話している姿を見て、栃木県に進学していなければ、きっと自分もこうだったのだろうと思いました。語弊があるかもしれませんが、私は、栃木県に来て、こうしていろいろな思いの中で震災について考えることができるようになり、よかったと思っています。

2) 東電が、2011年9月の発表では、放射能は現時点でチェルノブイリの10分の1だとしていたのを、2012年5月になって、2011年の3月だけで、チェルノブイリの6分の1の放射能であったと発表し、これまでの発表を覆したことを、ニュースを見ていなかったため授業中に先生の言葉で知ったときです。それまでは、そこまでの事態だという認識がなく、非常に衝撃的でした。危機感を感じ、それまで以上に原発について知りたい、知らなくてはという思いが強くなりました。

3) 今まで、東電のイメージはニュースで見る無表情なスーツ姿の人たちそのもので、現場で実際に働く人々のことについて知ろうとしたことはなかったように思います。しかし小原さんの写真展を見たり、講義を通して、そこで働く人々の表情や思いを知ることができました。一番原発の恐ろしさを知り、命を危険にさらしながらも働く彼らの表情は本当に凍としていて、胸を打たれました。東電の理不尽さには、知れば知るほど怒りがつづりますが、怒りだけで終わるのでは、今回講義を受けてきた意味がないと思います。授業を受けるたび、知らなかった事実をたくさん知ることができ、自分のものとして震災や原発の問題を考えることができるようになりました。これからも継続していきたいと思っています。

2011年3月11日に起こった東日本大震災、私はその時ちょうど早帰りの高校から帰宅して、母親と一緒にドラマの再放送をみようと思っていた時だった。私の実家は鳥取県で、地震の起きたときはちっとも揺れを感じなかった。テレビ画面がいきなり速報に変わって私と母はとまどっていた。東日本が地震でひっくりかえっているとき私と家族、友達は関東大震災のことは常に頭にあったにしても通常通り遊んだり買い物に出かけたりしていた。テレビなどでしか情報を得ることができなかったし、お店に食料がなくなるという状況も経験することなくいつもと同じ生活を送ることができた。ちがうことといえばテレビで常に地震の情報が流れていることと、駅前やショッピングモール前に募金活動をする人たちが大勢いたり自宅から毛布を被災地に送ったことくらいだ。言い訳のようになってしまいが、われわれは被災地に出向いたり、自分たちの小遣いで保存のきく食料を購入して送ったり、何か手助けをしたいと考えていた。しかし、鳥取という地は高校を卒業したての私たちにとってはあまりにも遠くやはり人に頼って募金くらいしかできなかった。今考えると非常に甘い考えしかもっていなかった。ニュージーランドで起きた地震、スマトラ島沖で起きた地震、毎度ニュースなどで騒がれるがわりとすぐに話題ののぼらなくなるので私はだいたいのが解決したと思いがちだったが実際はそうではない。しかし次第に騒がれなくなるので今回の地震もすぐに自衛隊やボランティアなどの働きで大きな被害は終結するのではないかとさえ思っていた。当時あんなに大きな被害をもたらした阪神・淡路大震災さえ、原爆が投下された広島さえ、今では立派な都市に復興されているからだ。今思い返すとなんでこんなに楽観視できたのかわからないし恥ずかしい。

宇都宮に上京してきて授業を受けて、いろいろな人の話を聞いて、たとえ1年以上たっていても3.11は決して過去の事ではないということを感じた。ときには涙ぐんでしまうほどにつらい出来事であることが理解できた。だが、一度地元に戻ると「宇都宮」ときいて地震の事に触れてくる友人はいない。たしかに友人同士で集まって楽しんでいるときにあんなにも悲惨な状況について蒸し返して尋ねるべきではないと思ったのかもしれないが、まだ渦中にあるのに記憶から消してしまうのは間違っている。小さい子供ではない、もう大学生になろうとしていた我々がたとえテレビを介してでも目の当たりにして考えたこと感じたことはまだ記憶にあるはずだ。せっかく深い事まで考えることのできる歳だったのだから忘れることなく次世代に伝えたり、自分たちなりにできることを少しずつでも継続したりする必要があるのではないかと感じた。鳥取でも以前西部地震という地震があったがすっかり話題に上らなくなった。祖父が何度も話してくれた過去の災害の話をちゃんと向き合って聞くべきだったと今更ながら後悔している。今度は我々が伝えていく番だ。地震自体は経験していないにしても大学に出て考えたことを子供たち、海外の人に伝え、現実としっかり向き合い、事態を深刻に受け止めたいと思う。

1) 事故が起きたその時は、大学の合格発表が終った時期でもあり、外に出て体を動かしたい気分だったので、高校の友達と魚釣りに出かけていた。その最中に私は3月11日の14時46分を迎えた。海ではなく川での釣りだったので、津波の心配もなかったが、防災無線の放送が聞こえないような場所だったので、地震のあったことを知ることはなかった。結局、地震のことを知るのは18時頃に家に帰りついてからだった。テレビで津波の映像を見たときに、これは大変なことが起きたと思った。映像に関しては確かに衝撃を受けたが、被害にあった人々の不安、恐怖、津波への憤りといった感情は、私は汲み取ることができなかった。「どうせ他人事だろう」という意識がどこかにあったのかもしれない。その後福島第一原子力発電所の事故が起きたが、その時にも、自分の健康が蝕まれる恐怖が、感情として先行していたのが本音であった。

2) この授業の中で一番印象に残っているのは、エリート・パニックについての話である。この話を聞くまで、私はリーダーや為政者こそが冷静であり、非常時には落ち着いて指示を出し、人民を安全な方向へと導くものだと思っていたが、大きく覆されることになった。非常時に一番パニックに陥りやすいのは実は為政者の側であり、為政者は「愚民はパニックに陥りやすい」という虚偽の前提に立つことで、自らパニックに陥るといふ。今回の3.11の原発事故への対応を見ても、確かに日本政府が冷静に状況を判断し、被害を拡大しないように的確に行動したとは思えない。逆に、非常時においては為政者側が発信するメッセージを解読し、私たちが冷静に行動することが実は重要なのだという発想には、納得させられた。

3) 本講義の最初の講義において、「偏差にこそ真理を見出す」という話をされたが、これを聞いた初めのころの私は、この言葉の真意を理解できていなかった。それでも、授業を繰り返し聞いていくうち、道理、正論、原則論だけで片づけられないこの複合災害の難しさを知った。原発事故は福島で起きたが、それでは放射能を含んでいる震災がれきを福島だけに押し付けてよいのか。米軍基地は沖縄にだけ押し付けて、本州の人間はそれを見て見ぬふりをして本当に良いのか。偏差に目を向けるということは、すなわちこのような見捨てられる人を作らないということである。日本社会を成立させている規則、秩序は、必ずこういったしわ寄せ(偏差)を受ける人々を生み出してしまう。だからこそ、99.9%側に立つ人こそ、0.1%側を顧みる必要があるのだ。「偏差にこそ真理を見出す」という考え方は元々は哲学の考え方であるが、私の、マイノリティに対する視点は大きく変わったと思う。

1) 地震発生当時、私はフランスで留学生活を送っていました。その日は寝坊したせいで朝のニュースを見る間もなく登校したので、授業の先生がとても心配そうな眼差しで「家族は大丈夫？」と聞いてきたとき、何を心配しているのか全く分かりませんでした。その後、先生が「日本で大きな地震があった」と私たち生徒に教えてくれましたが、その時点ではまだ災害の大きさを知らず、地震大国日本で日常的に起きている小さい揺れだろうと、とても軽率に考えていました。しかし、部屋に戻りニュースと中継動画を見た瞬間、それは私の想像を遥かに超えたものであり、自然と涙が溢れ、これから何が起きるのか、どうすれば良いのかと、遠く離れたフランスにいた私でさえ不安と恐怖、そして悲しみに襲われました。約4か月後、もうすでに世間も落ち着きを取り戻しつつある時期に日本へ戻った私は、結局地震発生当時に日本にいた人々の苦しみを知ることは出来ず、ただただ震災を振り返るメディアを通しての情報と、今もなお続く復興のニュースで客観的に東日本大震災を捉えることしかできませんでした。そこで、この授業を受講し、実際に震災を経験した様々な人々の様々な視点と向き合いたいと思いました。

2) 私はこの授業の中で、特に毎回寄せられる皆さんのコメントに心を動かされました。津波を体験した人、原発の近くに住んでいた人、ボランティアに行った人、あるいは遠くに住んでいて実感がわかなかった人など、それぞれが違った経験をし、それぞれから違った意見を聞くことができたのは本当に貴重なことだと思います。その中で感じたことは、いかに少数の人々の意見に耳を傾けられるかということでした。実際に震災発生後、しばらく「復興」という言葉を耳にし、国家を中心に世間も震災から立ち直ることに精力を注いでいました。被災者の声は毎日マスコミに取り上げられ、全国に、そして全世界に配信されていきました。しかし、1年以上過ぎた今、人々と震災はどこかかけ離れ、過去のものになってしまったように感じます。被災者の声はだんだん私たちに届かなくなり、社会の少数派になりつつあるのです。しかし、その人たちの言葉からこそ事実と教訓を知ることができることに変わりはありません。国家は震災を過去の出来事にしつつありますが、私は今もなお苦しんでいる人々がいる以上、そうした一つ一つの声を疎かにしてはいけなく強く思います。だからこそ、まずは同じ空間で授業を受けている人々の声を真剣に受け止めることが大切だと考えました。毎回寄せられるコメントこそが震災を今もなお身近であり、忘れてはならないことだと感じさせてくれる源になりました。

3) この授業では震災や原発についてだけでなく、そこから公害や戦争、最近ではオスプレイのことまで様々な分野を取り上げていました。また、様々な事柄に共通する点があり、今世界で起きていることも、決して人事とは思えないと感じるようになりました。また、常に犠牲者は少数派であり、少数派だからこそ疎かにされてしまうという、弱肉強食の社会システムを根本的に変えていかなければならないと強く感じたのもこの授業を受けてからの変化であり、まず身近で協力できることはないかと真剣に考え始めようと思います。

1) 大震災の時、タイにいました。ホテルの人に携帯でユーチューブを見せられ、津波がお家を飲み込む画像は今では印象深いです。その時、日本は終わったのではないかと思い、大学はまた行けるのかを考えていました。しかし、自分のお家は大丈夫かどうか、自分の日本にいる友達は大丈夫かどうかなど考えるのではなく（当時仲がいい留学生たちは殆んど国に帰ったため）、逆に、国にいる自分の両親のことを心配してきました。早速ホテルの電話を借り、中国にいる両親に自分はタイにいるので大丈夫だと伝えました。

2) 一番印象に残っていることはやはり、議論のときでした。議論でさまざまな考えが出てきたので、とても示唆的でありながら、震災以外のことも考えさせられました。震災後、「被災地の人ばかりかわいそう」、「放射能は危ない」、「ちゃんと対応しない政府は悪い」……など単純なものではないです。もっと深層的な原因を探ることによって、現代社会の科学技術の依存や、文明の脆さなど気づき、考えさせられました。

3) 震災以前はメディアが関心をどんどん薄れていると同時に、自分の関心も薄れました。テレビで見ないと考えない、或は考えるふりだけするのは授業の前の私でした。正直自分は震災当時に日本にいなかったし、震災後そのまま大阪にて中国に帰ったし、直接被災していなかったです。なので、震災のことは他人ことのように思い、放射能だと目に見えなく、心配はしているが、みんないるので大丈夫だろうと意外に楽観的でした。授業を受け、文明社会に生きる自分も原発事故の一因だっていうことをふっと思い浮かびました。原発事故は福島の人々の問題だけではなく、全人類の問題であることを認識し、さらに近代国家や社会について考えるようになりました。